

ず。されば彼は基督教時代の初年と稱せらるゝ時世の十年の間に、何の日にか、實際に此世に降誕したるものならずんば非ず。されど年月其ものは、さして重きをなさず。これをその年月の記念する事跡に比ぶれば毫も眞價無く、云ふにも足らぬ小事なり。吾人が心の裡なるベツレヘムに於ける、基督の誕生てふ一事の與ふる靈性的の價値に較ぶれば、人なる耶蘇が何の年はた何の日に生れたるかは、殆んど關する處なし。ベツレヘムとは、麵麩の家の義にて、基督はいへらく、『我は生命の麵麩なり』と。クリスマスとは、即ち天の使が、我等人類に大いなる喜の音を告ぐる其日を指して云ふべきなり。

ベツレヘムの小都會は、又たの名をエフラタと云ひき、之は豊饒の義なり。ホーマアの誕生地たるの名譽を得んが爲に、希臘の都市は屢ば互に相争ひたりとの事なるが、然るに基督に至りてはホーマアよりも遙に偉大なり。されば彼を生む

べき吾人が心裡のベツレヘムは、洵に實り豊けき、眞のエフラタたらざるべからざるなり。

靈性の結ぶ實は貴し、されど其中愛より大なるものと無し。智識智慧を結ぶの樹あり、正義平和を結ぶ樹あり、富貴安樂を結ぶの樹あり、されど基督の教へたるが如く、愛の實は、基督自から懸りたる彼の木に非ざれば結ばず。

予は大いに佛教哲學を重んず。予の之に就いて知ることは極めて寡少なりと雖も、予は其哲理の範圍と其徹底の見知とが、拉甸教父又たは煩瑣哲學者の説理よりも優れたるを認む。佛教は心的物的のあらゆる現象を説明したる驚異すべき思想の系統なり。而して又た佛家の壯嚴なる推論辯説は、之を譬ふれば地平的、匍匐的、爬行的にして、一隅一隈、其極微なるをも、悉く穿究せざる無し。佛教は

正に人智の勝利なりと稱するを得べし。

單純なるは基督の教なり。彼は何等の哲學系統を設けず、彼は科學を教へず。彼は社會學の法則を説かず。彼の論理は曖昧なり。彼の政治思想は甚だしく幼稚なり。されど斯く凡ての明白なる缺點あるにも拘はらず、彼は何をか成し、又た何をか成さざりし。哲理の幾多系統は彼の教訓を基として起り、此世の産みたる季見にして、なほ青年の客氣と紅顏とに輝ける彼の科學は、猶ほ唯物的の立場に在りと雖も、之れ亦た千年の昔、基督の説きたる宇宙人類の靈的意義を發揮するに補ふものたるの約束を示す。社會學に於ては、基督はその學說の前提たる人間の天性を説明せり。彼の論理は演繹法にもあらず、歸納法にもあらず、されど實に人の理性のみかは、又た其の全身全心をも説明するの能を有したり。その論理は確説なりき。彼が此世の政治に重きを置かざりしは怪しむを要せず。基督の主義は、共和か、王權か、壓制か、普通選舉か、財産制限か。蓋しかゝる論究

は到底盡期無からん。されど此等は果して人世に何の善益をか成せし。

基督が宗教上の教訓も、亦等しく單純にして、論證を要とせず。健全なる者、又た病めりと雖も、尙ほ最と僅にだも健康を有する者ならんには、何人と雖も、斯道を了解することを得べし。曰く汝の心に憂ふる處ありや、汝の心に不安ありや、一點の恥を思ふとありや、これ即ち罪なり。悔い改めて之を去れと。これぞ即ち基督が宗教の大趣旨なり。彼は意力に訴へて智能には訴へず。思考する力よりも、寧ろ實行するの力に訴ふるものにして、吾人が其範圍を地平的なりと稱したる彼の佛教の精緻なる哲學論に對して、之れは直立的道德行爲なりと稱することを得ん歟。

基督の神學も亦た複雑ならず。彼は多辯を須ゐずして、確信の人悉く信ずるを

得るものを教へたり。即ち父にして愛なる一つの神在すと云ふの教なり。彼は神の存在を論證するの勞を執らず。其事實は彼に於て甚だ明かなればなり。實にや吾人若し我が密室、我が心奥に退きて、自から己と語りて、神明の存在を認むるに於ては、此時、論理も科學も其要を認めざるに非らずや。

予は信ず、耶蘇基督の三教は、神の父性、彼れ自からの神性、愛の超自然力なりと。

基督の神性に就きては、ア、異論辯駁の多くして、可弱き我等が心の之が爲めに惑はさるゝことなるかな。人は、自家の智識の想像し得たるものに過ぎざる言語を以て、有限なる理解力の及ぶ能はざる事物を捉へ、かくて自家の靈性を説服せんとするも、果して之れを能くし得べきか。ルイ、コサツス言へらく、情界に於ては、人の言語は惘然なる通譯者なりと。吾人は之に附加して云はんか、言語

は、靈界に於て——天國に於ては——全く其用に充つること能はずと。

ア、此文を草するの時、予は傍にパスカルが書の在らんことを欲す。予の讀みたる人の中にて、パスカルは最も深く靈的生命の微妙に通じたるものなり。

(三十六年十二月)

軒冕勿忘山林氣
泉石須度廊廟經綸

時 感

吾人は今や再び時の分水點に立てり。舊歲去つて新年來るを見るは、此度こそ或は吾人に取りて最後なるかも知らぬども、決して之が初めてには非ず。吾人は樂しきクリスマスと、目出度き新年と、大晦日と、新魂の年とに伴ひ生ずる、かの奇しき感想を排する能はず。吾人は想はざらんとしても、猶ほ『時』に伴隨する感想を斥くると能はず。クリスマスは、其昔に生れたる嬰兒の物語を傳へて、由來頗る陰氣なる英國人の性情をも、兒子らしき快樂に満ちて嬉々たらしめ、且つ人心をして逝く年の鬪に立ち、新なる生命の權利を享くるを望んで、爲に備ふ處あらしめ、老幼は共に天の使の歌に唱和す。而して新年は聲を揚げ、歌唱の調を更に高めて、喜樂より幸福に進ましむ。

此時季に適する感想は、英文學の大路小路、社會習慣の平野、及び傳説の流域に遍く散在して、人は此時に特殊なる思想の侵來を免るゝと能はず。

吾人に取りては又た、大晦日おほみそかの最終日は、審判の日にして、年中の勘定を決算すべき日なり。此日には某々に對する負目を量り、之を皆濟し、棒を引き、吾人の帳簿面をして再び白からしむ。而して吾人は新曆日の始に於て、再び新たに勘定の口座を開く。新しき曆表と共に、吾人は貸借を新規にするのみならず、又た吾人の全思想を更新す。吾人の祖先は歲時の變遷を詩的に名づけて、『改まる』、『新生命』の意を以て、之を『新玉』と稱したり。吾人は須らく此の時季を良用すべし。漫りに此時をして過ぎ去らしむべからず。然らば吾人は如何にしてか之を用らべきか。

クリスマスに於ては、贈物に、讚美歌に、美食に、祝祭の歡を盡せよ。基督教徒にもあれ、異教徒にもあれ、凡ての人の家には喜樂あれ。基督は雷に基督教徒

の爲にのみ生れたるに非らずして、又た全世界の爲に生れたり。基督の事業は、教會歴史にのみ屬せずして、宇内人類の歴史に關す。彼の生涯は單に信徒たるを告白するものゝみを靈動するに非らずして、凡ての高尙なる言行を愛する人を動かす。彼の死は單に、ゴルゴタ山上の地を清からしめたるのみに非らずして、地球の全表面を聖ならしめたり。彼の精神は吾人の呼吸する此空氣に滿てり。而して吾人或は彼の名を嘲り、或は彼の繪像に唾し、或は十字架を陥み闢り、或は彼の生涯、彼の教義を批評せんとも、吾人は依然として基督の事業の分擔者なり。其恩澤に浴し、其功業に服す。基督は史上の最大事實なり。されば汝等彼の名を唱ふるものよ喜べ。彼を知らざるものも亦た喜べ。彼は汝を識る。

クリスマスは單に祝宴にのみ浮かるべきの時に非らず。吾人が此日を迎へて、之を喜びとするものは、快樂の故に非らずして、『地上の平和、人の恩澤』の故なり。平和無く、恩澤無くんば、快樂は即ち放逸なり、以て酒神バッカスに奉ずべきなり。

さなり。

此日や多幸なり。新教訓の生れ、新倫理、新法度の開基せられたる日として、吾人は此年の餘せる一週日をば、冥想反省して有用に過すことを得んかな。

大晦日おほみその大決算日には、吾人をして過去を回顧し、臆めずして一歳中の行爲を反省せしめよ。經に曰く犁に手を付けて後を顧ること勿れと。されど吾人は自ら戒めて、この訓言を誤解する無からんことを要す。業を廢せんが爲、又は目的に踟躕するが爲に後を顧みるは、薄志弱行を證するかなれども、若し既に畦を耕し終りたらん時、後を顧みて、畦は眞直なりや、其深さは一樣なるかと、之に心を用ひるは大に益ありとす。經驗上、畦を作ること、長きに過ぎず、短きに失せざるを以て、英國産良馬の成し得る最上の勞働と認められ、百三十ヤードを以て正當の畦の長さとする云ふ。吾人は經驗上より、時を定めて業を休め、省みて能く我手の業を察するを得んには、吾人が精神上の健康に裨補するところ少からざる

を知る。三百六十五日各睦の端に達する時、吾人をして止まりて後を顧み、何等の過失をか爲し、又た耕し起したる土壤に、何等の幸福の漲がれたるかを觀せしめよ。

予は信ず、一歳を回顧するに當りて、深く考慮すべき二事ありと。其一は吾人の享けたる凡ての幸福を想起する事なり。他は吾人の陥りたる凡ての過失を算ふる事なり。

人は謹慎なりとも、必ずしも有意無意いづれかの過失より免るゝこと能はず。

“To err is human” (過ちあるが人間なり) とさへ謂はずや。不完全なるが、人の稟性なり。或人云ひけらく、「毫も過ち無き人は、過ちばかりなる人なり」と。如何にして、又た何處に於いて、何等の過失を犯したるかと思ふは、健全なる判断力を練磨する所以なり。自から己れの過失を認むることは、即ち其良心をして清淨ならしむ。『自白したる過失は、既に半ば償はれたり』と。凡て正直なる靈

魂は、斯歳の勘定を終る時、己れの良心の審判の庭に平伏して、麻を着、灰を被りて悔改むべし。唯だ吾人の悔恨の必ずや不健全に陥ること勿れかし。人の生命は、假令不幸薄命ならんとも、一歳月の間悉く暗黒裡に葬るゝことはなかりき。

喜悅の光、希望の光、良き計畫、善き決心の光の、時々彼の道を照らさざりしとは無し。彼は天より、心裡より收め得たる善き物——彼が念々裡より湧出したる善き物を算へ立てずんばあるべからず。花の色香、鳥の歌、小兒の嬉笑、日出日没の光明など、一々に之を數へ見よ。然らば吾人の心に樂を與へて、而して吾人が之に對して感謝すること無き、無数の物は吾人の道に横たはれり。

感謝する心は、幸ある心なり、感恩と幸福とは密合して分離し難きこと、恰も驚くべき比翼織の、兩面に美麗なる紋様を現はすにも似たり。夫れ如斯くに、感謝すべき大晦日は、一面又た吾人を戒めて、幸なる新年の日を迎ふるの備をなさしむる

日なり。(三十九年十二月)

新年之責務

舊歲逝き、新年茲に來りて、予の所思又た死者生者の間に、往者來者の間に彷徨す。一刹那の現在が、過去未來てふ二つの無窮を連ぬるが如くに、元日は二個の生涯、即ち歴史に屬するものと、猶ほ未だ『時』の胎中に成り出てざるものとを結ぶ。

太陽の赫々たる行道は、地上に四時の季節を來たし、季節は各其無窮の循環をなして、人類に多様の責務を賦す。牧歌的時代に於て、吾人の祖先は、唯だ四季の則に従ふを以て其勞足れりとなし、昧然勤勞して、春は耕し、夏は耘り、秋は收め、冬は藏めたり。

牧畜詩代は詩人の好題目なり。吾人は之を以て、遅々たる牛背に踞し、聲無き星辰の樂に笛を合する長時連々の遊樂と思へり。而して農耕時代の生活も、亦た等しく吾人をして、辛勞無く不平無き、安逸適意の生活なるが如くに感ぜしむ。斯く吾人の想像は原始時代の單純生活に馳せ、吾人の心は之を憶ふて歎す。

吾人は過去に別るゝと雖もなほ之に繋かれ、之が魔力を被り、過去は曳きつ押しつ、一步一步に吾人に伴隨す。ヴァント曰へらく、「人のみ、其の過去と關する所あるを自覺す。動物的自覺は要するに、唯だ一時より一時に亘り、奈何なる場合に於けるも、其連續は個々の生涯の範圍に限定せらる。人間自覺の連續は、其最劣等の程度に於けるも、なほ少くとも數時代の傳承を含む」と。吾人は過去の産める物なり。老いたる枝上の若き萌芽のごとくに、各時代は苔蒸す歴史の枝頭より射出して、小枝となり、更に花實の新蕾を着くべし。されば葡萄の實の其蔓に

着けるが如くに、吾人の心は過去に繋がり、而して吾人は往時の傳說的黄金時代を追慕す。

されど吾人の責務は過去に存せず。過去は吾人の祖宗に屬す。休止すること無き太陽は吾人の爲めに他の時代、他の責務を齎し來るなり。

時代は變移せり。牧場は區割せられ耕されて田畑となり、田畑また繞らすに垣を以てして地を製造場に讓る。牧童の笛は聞く可からず。田植の歌、カキコ連枷の音は遠く消え去り、鄙人の聲は器械の響の中に日々に微かになりまさり、田舎の光榮は千萬の煙突より立騰る煤煙の陰に隱る。

時代の變遷と共に、吾人日常の責務も亦た變化す。各時代、各歳、各季、其特殊の要求を有す。時々の徵證を正しく解する者は賢なるかな、其要求を充たす者は幸なるかな。

『現在は吾人に重任を賦す、現在は看過すべからざる不公平に充てり。現在は禍害と腐敗との惡臭を放つ』と。かゝる泣言歎聲は陰鬱なる預言者の唇頭より出づ。吁、此の哲人よ。汝が瘦せさらばへる軀は、汝の兄弟と太陽との間に立ち、世をして若く暗黒ならしむるなり。地上に長さ陰影を投じて窮叟ダイオジニスより日光、暖氣を奪ふこと勿れ。

世は決して澆季ならず。而して人間は——彼はなほ其造物主の像を有す——蓋し其創めに造られし日よりも善良ならん。一旦彼の胸底に點ぜられたる光は、永遠に燃えて決して消滅せず。其の消ちたりとも覺しくて、唯だ微かに明滅するの時も、其過ちは燈心にもあらず、石油にもあらずして、空氣の故——酸素の缺乏せるか、はた又た風吹き荒むが故なるによるぞかし。

人の心は全然邪路に迷はず。現世も亦た然り。現時代の腐敗は聖者を局死せしめず、哲人を壓服せず。此世の不公平なる事は、之を尋ねるに熱中する眼、之を敬て聞く耳にのみ過大の状を示す。豚の世界を見るや、塵埃の山なり。塵埃の山や、豚は以て樂土——よし之より優れりとせずとも——の如くに美なりとなす。心の清き者は世を歩みて、凡ての男子は高尚に、凡ての女子は純潔に、凡ての地は神の宮なるを見る。斯る心の人々は、マーカス、オーレリアヌの所謂『宇宙的情感』に賛して斯く云はん。『大宇宙よ、予は汝が調和の一部を成せる凡ての者と調和す。予に於ては、汝の季節を得たる物、悉く遲速其度を得たり。ア、天よ汝の季節の結ぶものは皆、予の爲めに果實なり』と。

天然の季節の吾人の爲めに結びつゝあるものは果して何ぞや。天然の神の、其期満ちて吾人に要求するものは果して何ぞや。世界の吾人に期するものは果して

何ぞや。吾人の心を刺戟するものは果して何ぞや。吾人の人類に授くべき使命は果して何ぞや。

戦闘が若し吾人の爲し得べき凡てのものたり、はた最良なるものならんか、吾人は匈奴、韃靼人と何の擇ぶ所ぞ。羅馬人すら、唯だ戦ふを以て満足せざりき。

新年、また之に伴ふべき多くの歲月の事業は、大いに經濟的且つ道德的性質のものたるべし。

戦争の要務は破壊なり。其破壊的効力は實戦の場裡にのみ限られずして、悲むべし、社會の思想道德に其禍を及ぼす。ウエレスレー卿も兵士間の道德標準は、良市民を判ずる標準と異り、また異なるべきものなりと云へり。平和は好和の勇士を得て之を崇拜せざるべからず。再建設の時代は、破壊の時代の工師と類を異にせる者を雇ひ來らざるべからず。君其家を築かんに、必ずや一隊の消防夫を僞

ひ來らじ。

日露戦争は吾國家に多大の瘡痕を残したり。之を治すること其宜しきを得ずんば、傷は更に大に、痛は益す劇しからん。

吾人をして、製造、商業、農業の勇士——工業の將帥、勞働の勳爵士を有せしめよ。今や吾人をして血染の劍を打ち代へて、犁鋤、器械を造らしめよ。次回の戦闘は小銃大砲を以てするものに非らずして、算盤帳簿を以てするものなり。滿洲の野に於て戦ふに非らずして、世界の市場に於てし、露國を相手とせずして、地上凡ての國民を相手とせん。英邁なる青年、俊秀なる頭腦をして、向ふ處敵無き強大なる實業軍に参加して、其戦闘に従事せしめよ。

されば則ち、我國の天然及び經濟の富源を發達せしむるところ、之れぞ新たに吾人に賦與せられたる一大責務なれ。之を果す能はざらんか、兩大帝國に對する

戦勝の光榮も終に水泡に歸せん。

經濟上の戦闘のみは吾人をして雄大ならしむるに足らず。また其戦闘も、管に利益はた權力を愛するの念に優れる、強固なる基礎、又たは高遠なる思想無くんば持續するを得ず。英國の商業覇權は利慾てふ脆弱なる支柱を基とせず。獨逸が近時の發展すら、貪慾にのみ頼るものにあらず。况んや、米國の赫々たる進歩も、陋劣なる『黄金万能』の崇拜に職由するものならざるをや。

處を問はず、物を問はず、凡て一物の活動するあらば、其の處必ずや、活動せる其物よりも一層強き力の存するを見ん。君見ずや、濱邊に搖ぐ一粒の眞砂を——彼處には其砂粒よりも力の大なる者、即ち或は吹き過ぐる風あり、或は打寄する波あるに非らずや。君見ずや、一體の星が無限の空間を過ぎて墜下するを——彼處には、其星體を或は吸引し、或は反拒する甚大の力あるに非らずや。君見ずや、

一國其大を致すの時——彼處に於ては君必ずや、其全塊を膨脹せしむる大潜勢力の存在を認め得べしと感ぜん。此力こそ即ち國民の道德的品性なれ。

吾人今年の新舊を分てる『時』の分水嶺に立ち。眼を轉じて、舊歲を顧れば、吾人は我歴史に對して感謝すべき多くの理由あり。又た新年を測れば、吾人の心は其多望なるを喜び、而して吾人の前に開展せられたる嗣業を繼ぐに價值あるものたらんが爲めに、一層の進歩をなし發展を遂げんと欲するの、嚴肅なる決心を祈りて、我膝の自から前に屈するを覺ゆ。

(三十九年一月)

讀不盡者書 造詣不盡者人品

實際と理想との契合

人の身體が外觀だけなりとも、等對の形態を成せるよりして、人は延いて萬物を見るに、之を組織的に排置し、而も亦た之を外觀によりて總合するの誘惑に陥るなり。吾人が同長同形なる二本の手を有し、又た二個の耳、二個の眼を有するが故に、世上の事々物々も亦た皆同様に區別分類するに宜しきものなるがやうに思考するの傾向あり。左右と云ふが如くに善惡と云ひ——要言すれば、自然と生命とは、雙對の存するものなりとす。論理學者は、先づ事物を、或る性質と特色とを有するものと、此等を有せざるものとに分合し、後更に或る他の一定標準に隨つて、之れに合せるものと、合せざる者とに小分し、而して結極まで、此の二種別の分合を繰返すものなり。

色に依つて花を分類する時、吾人は、赤と赤ならざるものとの區別し、又た黄と黄ならざるものとの區分し、而して彼此の類屬の別が、吾人の心裡に明白なるに至るまで此方法を追ふ。

吾人は此二區分法を立脚地として、事物を観察するを常とすることよりして、事物の兩極端を観ずるの過ちに陥り、反對なる思想にも、自から契合する點のあることを忘るゝの弊あり。若し一端が黒色にして他端が白色ならば、其間には濃淡各様の灰色を呈するものなり。固體元素が氣體となりて蒸發する前には、一旦其中間の液體を成さざるべからず。有名なる某地質學者は、英國海岸の事を記して、往時一條の河流が徐々に海に注ぐよりして、同一地方が満潮には水となり、干潮には陸となる處ありたりと云へるが、満干二潮の中間に在りては、其所は陸にも非らず、水にもあらず、又た水陸兩がら存せるものにも非ざらりしなり。

道德觀念に於ては、善と惡との讓合コンプロマイズをば、道念薄弱を證するものなりとして非

難するかなれども、此の善と惡との間にも、廣大なる中立地帯ありて、茲に在りては、方正なる人は苦悶し、又たやゝ不用意の徒は『實際生活』とか、『免るべからざる惡』とか、『實利の要求』等とかいふ陳腐の語を以て自から慰め、又た惡人は汚泥に安ずるなり。

歴史の影薄らぎて神話となり、又た神話の明輝して歴史と現ずるの境界あり。希臘の半神時代、日本の地神時代は即ち是れなり。人の靈的生活に於ても亦た、智識が既に満足を與へずして、科學を去りて宗教を迎へ、哲學の向上して信仰となるの一帯在りて存す。

吾人の日常生活は、吾人に供するに、人生の最も卑しき實際事が、理想に混入し、又た理想が最も賤しき勞役の形を取ることあり。フィリップス、ブルークスは、この眞理を最も明かに認知したる哲人なり。彼曰く、

『實際生活とは果して何ぞや。地上の生活の悲しむべく卑しき瑣事の謂にして、

而して其汚泥中に靈的超凡的なる果實花房を生ずるの種子を藏するとの暗示を以て靈動せらるゝことなきもの、謂なる乎。之に反して又た實際生活とは、天上の星よりも高さ一界に於ける生活の幻影にして、其生活の超越脱棄したる人類界の荒涼墮落せる状態と、何等の關する所無きものを謂ふか。否決して然らず。人の實際生活とは、最賤最凡の經驗によりて培はれ、之れと絶えず聯接せる、人の最高なる成達を謂ふものなり』と。

(四十年一月)

よもすから佛の道をもとむれば

わかこゝろにそ尋れ入ぬる

僧都源信

人物崇拜

米國は其地廣大無邊なり。ロッキーマウンテンや、シエラネバダや、蒼穹に聳え、ミスシッピや、コロンビアや、渺茫たる大平原を流る。コロラドの峽谷は邃として其深さ幾許尺ぞ。ナイヤガラの懸瀑は怒號天を劈いて竦然たらしむ。予の一たび足を此地に入るゝや、其大陸の廣袤は、新たに又た斷えず増大するの勢を以て、予の心に強き印象を與ふ。夫れ眞に偉大なるもの、特色とは、人の之に思を馳すること多くして、其量が人の推測想像の量に正比例して、いよゝ／＼深大なるを致すものなり。然るに些々たる事物、斗屑の小人に至りては、彼等に若し暫く吾人の迷想を動かすべき壯大の觀ありとも、やがて衰小して本來の微々たるに歸す。然るに唯だ神のみ、人の其性を精察すること更に深く、其徳を觀ずると更に高くして、

よく大、よく深、よく不可思議、よく驚くべきを加ふ。

偉人善人は神性を分有す、彼等は無限大の資質を備ふ。吾人は唯だ心と目とを役して、俊傑の細瑾小過をのみ見るの下僕にあらずんば、吾人は崇拜の目的物に就いて、絶えず之を尊重すべき新らしき理由を認むるなり。崇拜の念の失せたる人は悲むべし。"Nil admirari"(無崇拜)は危殆なる道德病の兆候なり。高潔なる人間、就中青年輩は須らく、自己に優りて高尚偉大なる者を尊重崇拜するの念に満つべきなり。崇拜することを知らざる人は、涸れたる泉の如く、自から其渴を愈すること能はず、又た其下流の田野をして喜色あらしむるもの無し。山間の溪流の、欣躍急奔して、大河に合するが如く、河水の海洋を求めて流るゝが如く、堆土は丘陵の一階段たり、丘陵は山嶽の始めなるが如く——如斯くに、彼のセミトクリーズの徒は、マラソンの勇士の列伍と脛を交へんことを希ひ、吾人は又た如斯くに、筆は兼好、忠は楠氏の壘を摩するのみかは、而も亦た我力能くせんには、之に超越せんとを志とせずんばあるべからず。

予は大いにリンコルンを崇拜す。彼を學ぶこと久しくして、彼はいよく我に大なり。而も其缺點すらも、其瑕瑾次第に消えて、吾に之を看過するのみかは、又た之をすらも愛好するに至る。之れ實に吾人の陥らざらんやう誠むべき人物崇拜上の危険なりと知る。されど予は自白す、予は之より免るゝと能はざるものなることを。而して又た、此人の缺點は、人類の幸福に害あるの類に非ず。彼の不恰好なる容姿、粗野なる態度、其醜貌は、彼の濃厚仁恕を思ふと共に、乍ち之れを忘る。然り此等は、斯人の穩和、質樸、寛容を不完全ながらも表相するものとして、大いに愛好すべきものとなる。

予の此文を草するや、リンコルンの半身像は、予の前に坐せり。冷きカラ、大理石の唇頭には聲無し。されど予は其唇が、予の愛唱する "With malice towards none, with charity for all" (何人にも害を加へず、凡ての人に對するに愛を以て

す)との語を以て微動するを見るの感あり。視るとなき窪き眼には、神と人との對する幼兒の如き信仰は閃き、其秀てたる額の皺は、彼が幾許の滑稽談にも被ひ隠すと能はざる、深き悲哀愁思の存するを示す。其の凜然たる眉、秀て、高き鼻には、人を服するの威あり。其口其顎は、決意斷行の人格を證す。蓬髪を戴ける長頭—吁、此の一圓塊は、米大陸の大よりも更に驚嘆すべきものを藏す。

詩人曰へらく『義人は、神の業の中最も高尚なるものなり』と。造物主は、其造りたる最後の大陸を此世に置くや、ロツキ—山脈より人道の大塊を削りて、之を包むに大平原の軟土を以てし、其鼻に我が生命の息を吹き入れ、之れを名けてアブラハム、リンコロンと云へり。

(四十年二月)

獅子窟中無異獸 象王行處絕狐蹤

春 想

日輪の進み行くにつれ、季節の移る毎に、我等は其折々の使命に心を留めんことをよけれ。鳥の歌、花の色にも、多くの歡樂、様々の教訓のあるに非らずや。

鶯の歌に耳を敬て、これよりして、自然の語る臃なる聲と、自然が人の心に奏づる樂音を寫したる多くの言の葉とを聞くこそよけれ。斯くする人は、其心天に向つて開き、而して雀の囀るにだも、彼は天津御空の音れを聞く。

綠なす草地、黒金の土より萌え出づる花に目をとむることよけれ。一莖の草にも、秘密の秘密たる生命てふものが半ば隠れ、又た半ば現るゝに非らずや。『破れたる壁に咲く花』だにも、哲人の手に在れば、最も大いなる問題、乃ち神と人との問題を解釋するの契となるとかや。梅花今や馥郁たり、然るに梅の枝に隠れ

たる寶のあるに思ひ到らぬ人こそ、春來れどもなほ富まずとや謂ふべし。

されど思へ、自然は、人を罰することの外には、何事にも攻勢を取らざること。自然は聲高らかに命令、訓戒を宣せず。自然は、聞かざる人には黙し、問はざるものには語らず。自然の使命は、見るを厭ふ目には隠れて開かれず。

自然の戸の前に跪く人のみ、彼女の室房の秘めたる所に迎へ入れらる。崇敬とは、用ゐて新舊大小の富を藏する自然の寶庫を開くべき鍵なり。

幽玄なる眞理は、其自然的になると、精神的なると、又た人間的なると、神靈的なるとを問はず、吾人は其前に膝を屈し、吾人の頭の垂るゝの時に、初めて最も深く其奥に入るを得べし。

好奇にして無禮なる科學が、解剖刀と顯微鏡とを携へ來り、傲然として自然を精察するや、彼女は即ち科學に與ふるに、其求むる所のものを以てす。——ア、されど之れ單に斷片零屑のみ、蓋し他に又た與ふる所無し。感情は自然を大急ぎ

に瞥見して、一二律の輕薄なる歌を捉へ、而して自から此世に與ふるに多くの輕薄なる歌を以てし、かくて青年男女を惑はして、自然の嚴且つ眞なる使命を聞かざらしむ。

自然の最も壯嚴なる教訓は、之れを傳ふるものが、聲朗かなる鶯にもあれ、香り高き梅にもあれ、囀る雀にもあれ、路傍の草にもあれ、皆吾人をして神と人に近づかしむるものなり。

“I have learned

To look on nature, not as in the hour

Of thoughtless youth; but hearing oftentimes

The still, sad music of humanity,

Nor harsh nor grating, tho' of ample power

To hasten and subdue.”

一撮の鹽

俊傑の士も、之れを崇拜する人の信ずるが如くに完全なること稀にして、又た汝の敵が、汝の考ふるが如くに悪人なることは更に稀なり。一年、僅かに數日、富士山は、畫家の筆に上るが如き美觀を以て、其靈姿を現ずるのみ。されど又た其の山容の隠れて見るを得ざるが如き、暗黒陰沈の日の來るは更に少し。人生は樂天家が、其歌に述ぶるが如くに樂しきものにもあらざれば、又た厭世家が、悲しき歌もて語るが如くに苦々しきものにも非らず。

一撮の鹽！吾人は鹽を用ゐて凡ての物を加味し、吾人の趣味に適せしむべきなり。人は各異る所あり、誰しも其隣人と悉く一致すること能はず、又た多少の斟酌を施さずしては、誰しも其友人若くは其敵の意見を承認すること能はず。

天使の歌ふや、吾人は莞爾として之に耳を傾くると雖も、なほ其歌調が高きに過ぐるを感ぜざると能はず。惡魔の叫くや、或は其語中に多少の眞理を發見せんとして之に聞く。黄金を砂塵中に認むるが如くに、大なる虚言にも、往々眞理の閃光あり。又た信實なる話にも、時として無意識の訛傳の潜めるあり。最も賤しき實在にも理想存し、最高の理想も、卑賤なる行爲によりて、其全部若くは一端を實現せしむることを得るなり。

一撮の鹽なるかな！されど吾人は注意して、其分量を過すべからず。多きに過ぐれば甘さをも苦くし、又た少きに過ぐれば不味の肉を嚙下せざるべからず。判然と鹽の分量を定むる嚴密なる規則の據るべきものあるに非らず。人は各自、自家の鹽量計を有すべきなり。『悉く書を信ずれば、書無きに如かず』と。書を読むには分別あるべく、學ぶには批評眼あるべく、考ふるには敬意を以てすべし。正確なる判断、善良なる趣味は、人生の必需なり。節度、貴き中庸は、正當なる判

斷、良好なる趣味を得るの秘訣なり。夫れ鹽は緩和者なり。

(四十年三月)

はちす葉の濁りにしまぬ心もて

僧正遍昭

なにとて露を玉とあさむく

見ればたゞ何の苦もなき水鳥の

水戸黄門

足にひまなきわか思ひかな

さくら

梅花の美、其香、又た鶯の歌が、^人入の心に與ふるに爽新の氣を以てしてより、未だ數週日を出でず。彼時は空尙ほ寒く、地は冰り、他の花の未だ此の勇ましき花の魁と、其榮を競ふものあらずして、世は實に梅花の御世なりき。

されど時轉じ季移りて、梅花の美も、其香も皆共に消散せり。吾人は其餘々に移ろひ行くを打成り、最後の花瓣がいやはての安息^{やすみ}の床に就くを追ひき。見よ、彼が正統の後繼者は出現せり。今や花王の御威稜は世に普し。花の王統は徐に、此より彼に傳へて、其間に革命の痕跡あるを見ず。梅花の凋落を打成りつゝありし時、吾人は太陽が吾人の身邊に來しつゝありし變化に殆ど留意せざりき。

今や吾人が異れる支配權の下に立てることは、吾人の感覺が之れを證して餘りあり。梅が吾人をして靜想に耽らしめたるに反し、櫻は其快活の氣を以て吾人の情を嬉々たらしむ。冷かなる清教徒の時代は去りて、王政復古の暖かき快樂の日は來りぬ。歴史に於いてし、個人に於てするが如くに、歳の季節に於ても、一の宿命の理は行はるゝなり。斯く云へばとて冀くは誤解する勿からんことを。宿命の理と云へばとて、予は單に人生を暗淡に、厭世的に、又た凶兆的に觀じて、世を惡魔の支配する處なりと信ずるものに非らず。之に反して予は時に榮枯あり、潮に満干あり、心理に悲喜ありて、彼此交代するものなるを信ずるものなり。櫻は梅に繼ぎ、而して又た其後へには嚴肅なる競争者來りて之に代り、其の力を奪はんとす。花各其季節あり、色々の花咲く毎に、之れを樂しむこそ賢けれ。櫻の笑を呈し、花瓣の空に戯るゝの時に當りてや、吾人は俯屈なる業務を擲ちて、公園に遊び、林に入らんかな。吾等は櫻狩せんものぞ。眞面目なる老人よ、青春

の快樂を味ふべし。謹深き婦人よ、心輕げに笑へかし。可憐の小兒よ、嬉々として、驅れ、叫べ。

予は曾て櫻は大衆の爲にありと云へり。梅が人の智識に訴るに反して、櫻は多く其情感に訴ふ。櫻が其冷然たる姉に優りて、此利益を有する所以のものは、其の治世の、天然が人の血液を暖めて、脈管の流動を速かならしむるの日に來るを以てなり。梅花は頭腦の爲なりと云はゞ、櫻は情感の爲なりと云ふを得ん。彼は孤樹嶢然として花咲くにも、之れを樂むべけれども、櫻に至りては、多樹の集合するに於て、最も美しとす。彼は遅々として旬日に耐ふると雖も、此は來り留まること少時なり。されば諸人をして、心ゆくまで櫻の興ふる短き歡樂を味はしめよ。多大の樂を得て、其日の短かきを償はしめよ。

櫻は人に持囃さるゝが爲なるか、其姉たる梅よりも災厄を招くこと多し。其美しきは、花見の客の慾情を誘起し、名も知れぬ下手の歌人の、我が巧みを誇りがに、自作の短冊を附けたる櫻の小枝を家土産となすもあれば、醉漢の、爛熳たる枝を天秤棒となして酒樽を荷ふもあり。かゝるたぐひの災厄は、櫻の美しきが故に招くの禍なり。實にや古歌の此美を歎ぜることや。

咲かざれば櫻を人の折らましや、

櫻の仇は櫻なりけり。

其美の著しく凡眼に映ずること、如斯くなるに、而も櫻は自衛の武具を有せずして、只だ心無き手の暴らすに任かす。歐洲に於ける之が競争者の如くに刺を具せず。此二花は實に東西兩洋を代表するものなり。薔薇には熱意あり、櫻は浮氣なり。薔薇は生命を惜みて、其枯死に泣き、櫻は死を輕んじて、梢より飛び風に

飄る。薔薇は個人的なり、自主的なり、一輪の花にも一輪の美あり。櫻は花瓣の簇ること多くして更に賞すべく、一輪の花は花團を成すが爲に其個性を没脚す。薔薇は權利を表はし、之を要求するの器關を有す。即ちニーチエが主人道徳と稱するもの、代表者なり。櫻は義務を表し、其運命と認むる所に服従す。彼の獨逸人ならば、或は之を稱して、奴隸道徳の典型なりと云はんか。されど薔薇も尙ほ抑損する所あり、翫賞者より見下さるゝに満足して、樹木の大きさに成長すること少し。之に反して、櫻は崇拜者をして仰視せしむ、櫻の灌木たることは稀なり。

吾人が櫻散る木の下蔭に立つの時、心は浮世の外に飛び、舊思を忘れて、新想の我胸臆に脈々たるを感ず。吾人は暫く、人生の戰場なる事を忘れて、現世の生涯を楽しむ。此時、農夫も鋤を棄て、お婆さんも紡車を休め、哲人も書を去り、武夫も劍を投ず。吾人をして、今の快興に伴はざる思想に馳すると勿らしめよ。

君よ、乙女子が叱々の聲を聞かずや。

咲いた櫻に

なぜ駒繫ぐ。

駒が勇めば

花が散る。

武夫の心、軍馬は、我が櫻花と調和を缺くものなり。汝、花の美を眺めんとするか、先づ其兜を脱すべし。昔より櫻は武士の心を型るものとして知られたことなるが、これは『さむらひ』とは、只に下凡の戦士の謂にあらざるを證す。櫻は戦闘者たる『さむらひ』を代表するものには非ずして、品性の人たる武士を象る。

吾人が櫻樹の蔭に徘徊するや、多くの回想の、自から吾人の心に來るあり。されど櫻の吾人に齎し來る使命を守らんとには、須らく此等の回想を他日に擲つべし。清風萩の花に戦ぐの秋か、はた又た梅花の氷雪に薰ずるの冬か、此等は實に

回想沈思の時なり。今の如きは唯だ樂み浮かれて、心を喜ばしむべきなり。

(四十年四月)

よしの山やかて出しとおもふ身を

花ちりなほと人や待らん

西行

風さそふ花の行へはしらねとも

なしむ心は身にとまりけり

講演集

ゲーテとカーライル

ゲーテとカーライル——これは容易な問題で無い。併し近頃の文學者の流儀に倣つて、焼直しをする積なら、格別面倒もなからう。之を論じた書物は澤山にあり、神田邊の本屋へ往けば、カーライル論とかゲーテ論とか云ふ本が、五錢か十錢で賣られてゐるで、諸君も態々改めて僕の説を聞くまでも無い。僕も亦た本さへありや、造作無くコンナ事の講演は出来るのだが、生憎不意の事ではあり、また今は旅行中なれば、手許に参考書も無いので、實は困る。だが只だ茲で得難い——貴いからでは無く、書物には載つて無いから得難い——ことを話さう。それ

は今日まで僕が人に話さ無い事である。

それは即ち僕が傳記の一言なので——僕の傳記は何の役にも立たぬが——それは單に、僕の傳記と思は無いで、日本近時の思想界の變遷の一例であるとして聽かば、何程かの値はあるだらう。他でも無い。明治十三年、丁度僕の十八九歳の折、北海道の學校にゐた時に、妙に憂鬱に陥つた。これは誰にても能くあることで、十六七から二十四五、少し遅い者は三十歳前後、折には三十四五位までも、人は往々憂鬱に陥るものだ。カーライルも屢ばさう云つてゐるが、斯くなるのは人間に當然の事なので、鬱氣にならぬ位の者は、靈魂が半分しか無いのだから、完全な人間では無いと云つてゐる、詰り不具者なのである。僕も其時代が來て憂鬱になつた。いろ／＼の事が甚だ面白く無くなつて、今日であつたら、華嚴の瀧へなりと、ヒョコ／＼出掛けやうかとも思つたらう程に、大いに煩悶したが、幸、其頃は未だ華嚴の瀧の流行が始まらぬ時分で、又たヨシ流行つたとしても、

北海道から遙々日光まで死出の旅に出かけて往くにしては、當時汽車も無し、それに又た難有いことには、ソナナにまで懦弱で無く、それ程に意志が墮落してゐ無かつた。だからイクラ煩悶しても、死なうと云ふやうな馬鹿げた考は毛頭も起さ無かつた。それで今日までもグズ／＼ながら斯く生き永らへてゐる。

◎初めてカーライルを知る

併し其當時には随分苦しく思つたから、何につけても不愉快。て何處にか慰藉を得んものと、種々雑多の書籍を漁つたけれども——お耻かしい事ながら、殆ど意志も無く撰擇も無く、手當り次第、見つかり次第の書籍を読んで慰藉を得やうとした。然るに不圖、米國の一雜誌『インデペンデント』を見たところが、其中にカーライルの云つた句が引用されてあつて、如何にも面白く感じた。コンナえらい思想があるものかと思ひ、それから斯人の書物を読みたく思つたけれども、

其頃北海道の山奥には、カーライルと云ふ名前さへ聞えてゐ無い。札幌農學校の書籍館に入つたとて、カーライルの片影も無い。人名字書を見れば、チヨイ／＼と書いてはあるけれども詳しくは無い。

◎日本には其書無し

其後——明治十三年の夏の頃東京に來たが、來るや否や丸善に往つて、プラタークの英雄傳と、カーライルの『サルトル、レザルタス』とがあるかと聞くと、ヘエ數學の本なんですかななどと云ふ。イヤ數學の本ぢや無い、カーライルと云ふ人の本だと謂つても、ソナナ人の名は知らぬと云ふやうな譯であり、また其時分大和屋と云ふ書店があつて、其處へも往つて聞いたが、同じく無い。十字屋には珍しい書物が澤山に來てゐるので有名であつたから、往つて見たが、矢張りソナナものはツイぞ知ら無いと云ふ。それより氣付いただけの書店を、ナカ／＼二十軒

や三十軒できかぬ程、片ッぱしから尋ねて廻つたけれども、どこへ往つても、其書物の名稱さへ知つたものは無かつた。それから横濱へ往つて、ケレー、ウアルシユで尋ねると、流石は西洋人の書店だけに、名前はチャント知つてゐたが、ソナナものは買ふ人が無いから、取寄せては置かぬと云ふ、またブルタークも無いと云つて斷られた。

かくて讀みたくてたまら無い書物は、ドウしても手に入らず、さうなると尙の事見たい。で遂に或外國人に頼んで、この二書を手に入れやうとした。尤もブルタークの方は、北海道で一度讀んだのだが、日本の書店には未だ一冊も賣つてゐる無かつた。カーライルに至つては尙の事、我國の本屋には影も形も來てゐ無かつた。それで遂に外國人に頼む始末になつたのだが、幸、或外國人が歸國するのて、藏書を賣ると聞いたから、其人の處には、事によると有るかも知れぬと思つて、往つて見ると、小さなロングマン版のが一冊あつて、賣品の中に交つてゐた

から、飛び付くやうな思ひで買つた。又たブルタークの方は、米國へ註文する
ことにした。これは實に二十五六年前の事であつた。

然るに今日では到る處にカーライルを唱へ、カーライルなんかは陳腐だ、彼の
本なんか見るのは厭だと云つても、何所の書店にもカーライルが並べてある。こ
れは日本人の思想が進歩した結果であるかドウか知らぬが、兎に角文學の我國
に普及することの早く、日本學生の思想の諸方面に行き渡ることの廣さ加減とい
ふものは、實に驚くの外無きことである。今日のやうに日刊新聞にても雑誌にて
も、カーライルの滑稽談や文章が紹介されてゐるのに比べると、僅に二十五六
以前の日本に於ける英文學の智識は、實に狭小なものであつた。

◎靈魂病を救はる

僕は『サルトル、レザルタス』を得ると、渴者の飲を求むるが如き勢で讀んだ。

すると如何にも僕の望んだ通りで、これまでの煩悶憂鬱が、乍ち雲消霧散して、
丸て復活したやうな氣持になつた。藥は苦いと云ふが、まるで甘露の如き味を以
て、病める靈魂の藥餌を得た心持がした。それから以來は屢ば讀んで、遂に綴目
が切れてバラバラになつた爲、二度製本屋に綴ぢ直させた。ハッキリとは覺はて
ゐないが、凡そ十八遍位は讀んだであらうと思ふ。或る部分は暗記したこともあ
つた。

『サルトル、レザルタス』は、僕に取つて、命の親とも云ふべき恩人である。其後
に至つて、カーライルの他の著述も讀んだ。例へば『佛國革命史』又は『フレデ
リック大王傳』も讀んだが、矢張り此の『サルトル、レザルタス』に優つたもの
は無いと思ふ。今でも旅行などをする時には、『サルトル、レザルタス』を携へて
行つて、幽鬱になつたり、心細くなつたりする時に、之を讀んで慰藉を得ること
が多い。それに就いての話だが、或時一人の友人が來て、君はまたにカーライル

崇拜かと叱つた。僕は實にお恥かしいが、まだにカーライル崇拜であるのだ。日本には既にカーライルを呑込んで仕舞つた人も多いやうだし、カーライルは二十五六までは宜いけれども、其以後には讀むに足らぬと云ふ人もあるが、僕は四十以上になつても、依然たるカーライル崇拜で、實にお恥かしい次第である。尤も段々年を取ると、青年時代の靈魂病を患つてゐた時ほどに、此カーライルと云ふ藥の利目は無い。それはドノやうな本でも同じことだ。けれども僕はカーライルを命の親と思つてゐるから、まだに棄てはし無い。屢ば讀んで、殊にこれは實に名言であると思つた所々には、しるしを附けて、明治何年何月に幾度此處を讀むと書いてある。されど先には僕の心は非常に動かされた文句も、今日になつてそれを見ると、十七八年前にはコンナ事に感じてゐたのであるか、今では何とも感じ無い句だと思ふ事があつても、まだく僕に取つては此のカーライルは棄つべきもので無いのだ。假令今はカーライルと説を異にする處があつても、兎にも角

にも命の親であると思ふからして、何も孟蘭盆に限つたことでは無いが、昔風の人が孟蘭盆に佛様を祭るが如くに、矢張りカーライルの書物を祭るが如き心持であるのである。何程、君はまたにカーライルをやつてゐるのかと叱られても、然りと返事するの外はない。昔日の如くに、頭から崇拜するのでは無いが、なほ恩人として崇拜をつゞけてゐるのである。

◎文章は人格を現はす

序に云ふが、凡そ或人の文章を始終讀んでゐると、自分の文體も、其人のに似て來ると云ふことを聞いてゐる。僕が學校にゐて英文學を學んだ時分に、英人のコックスと云ふ教師から、ドウも初の頃の文章に比べると、後の頃の文章は、イヤにゴツ／＼して仕舞つたと叱られたことがあつた。これはいくらかカーライルにかぶれた所爲であつたらう。て其時にも、成程他人の書を読む時には注意しな

いと、自分の文體が毀れて仕舞ふと思つた。カーライルの文章は決して良い文章で無い、日本人はカーライルを読んでも、其文體の眞似をし無いやうにせぬと宜しく無い。尤も僕の如くにカーライルを十八回も讀まうが、よし百回二百回讀まうが、カーライル風の文章を書かうと思つたて、それは出来るものでは無い。心持からしてカーライルのやうに變つて來無ければ、文體も決して變ら無いのだ。故にカーライル風の文章を書かうには、其著書を何百遍讀むよりか、寧ろ先づカーライルの如き氣風を有するやうに努むるが宜からう。

◎恩人を知らず

カーライルと云ふはドンナ氣風の人かとならば、個人として交際するには、甚だ面白く無かつた人であると思はれる。今日はカーライル紀念物保存會と云ふが成立つて、カーライルの始終喫んで居た煙管なり、書物なり、着物なり、帽子

なり、靴、紙、インキ壺等まで、あらゆる物品を生前のまゝ並べ、彼の室内に、椅子はこゝに斯うなつて居たとか、皆調べて保存してゐるさうである。然し僕が十五六年前、初めて倫敦へ行つた時には、未だそんな事は無く、彼が住跡の舊家の窓硝子は破れ、戸は締つたまゝでゐた。カーライルは生前に世間で尊敬されたに比して、死後に其家までが保存せらるゝほどに、社會は斯人を尊崇してゐなかつた。少し話が他に移るが、カーライルの住んで居た倫敦のチェルシーと云ふ處は、たいした町でない。カーライルの舊宅から二三町許りの小公園に、大理石で刻んだカーライルの坐像が立つてゐる。僕がそれを見に往つた時、穢い風俗をした勞働者、日本で謂ふと人足が、五六人許り集つてゐて、一人が其像を見て此男は誰かと言つた。すると他の者が誰だかな、お前知らないか。知らない。何者だらうと言ひ棄て、ズーツと行つて仕舞ふから、僕はオイ／＼と呼んで、お前達は此像を知らないのか。知らない。あの人はカーライルと謂つて、勞働者の爲に

大いに味方をした人であると話す、さうかと言つて態々戻つて来て、日本なら
お賽銭を上げる所だが、それ相應の敬意を表して立去つたことがあつた。其時に
ア、流石のカーライル、あれ程労働者の爲めに盡した人でありながら、此處を過
ぐる労働者にして彼を知らない者があるのかなと歎息した。如何に英國と雖も、
労働者悉くが斯人を記憶して居ると云ふ譯にも往くまいが、兎に角彼の死後の早
き頃は、世界の人の彼を尊敬したことは、今日の如くでは無かつたと思ふ。

◎氣に喰は無い人

しかしカーライルは生きて居つた時よりも、死んだ後の方が人に愛せられるの
だと思ふ。カーライルが生きて居つたときの話を聞くと、甚だ氣に喰はない人
あつたのだ。其文章に現れた通り、ゴツ／＼した人であつた。僕は曾てカーライ
ルの隣に住んで居た人の話を聞いたが、細君が能く泣いてをつたといふことだ。

また客が來ても振向きもしないと云ふふうであつた。カーライル崇拜家なる米國
の一青年が或時英國に來て、是非一度大先生の聲咳に接するの榮を得たいと言つ
て、極めて丁重なる書面を出したところが、カーライルから、何日の何時と記し
た簡単な端書の返事が來た。これは辱無いと、其時刻前に身仕度怠り無く、謹み
畏みて、チエルシーの家を訪問すると、書齋に案内された。通ると、中には一人
ウス穢い老爺が机に凭つて、何か書き物をしてゐて、客が辭儀をしても決して振
向か無い。青年は手持無沙汰に黙つて立つて居ると、折節紙が一枚散つた。する
とカーライルが、オイそれを取れと命じた。早速に取つて渡すと、又た黙つて
立たして置き、暫く經つてから、オイお前は亞米利加から來たと言ふことだな、
乃公は亞米利加人は大嫌だよと云つたさうだ。こんな人であつたから、個人とし
て交際するには、甚だ不愉快な人であつたらしい。それに甚だイコチな人であつ
て、一步も人に譲ら無い頑物であつた。

● 女皇と哲人との對面

英國女皇ヴィクトリヤ陛下が、或時是非カーライルに會ひたいと御意あつて、先生に拜謁を許されやうとした。所がアベコベで、女皇の方から先生に拜謁をお願ひ申すやうな譯になつて、大臣か何か頼みに來た。陛下には先生にお會ひになりたい思召であるが如何であらうと云ふと、それは會つて上げて宜いが、乃公は他所へは行かないぞ。併し宮中まで御足勞を願ひたい。イヤ乃公は宮中などへ行く用がないと怒鳴つた。それでもまさかカーライルの家へ、陛下が御臨幸になる譯にも往かないので、遂に双方から出て、或場處で落合ふことになつた。そこへカーライルが先きに來たから、待たして置く。刻限になつて、ヴィクトリアが御着になると、カーライルは立ちもしないで黙つて居る。紹介者が、之が陛下でございます、之がカーライルでございますと云ふと、カーライルはハアさう

ですか、豫てお名前は………と言つた位なものであつたさうだ。

● 胃弱先生

如斯き風であつたから、甚だ不愉快な人物であつたらう。殊に此人は胃弱であつた。されば我々のやうに幾ら飯を食つても、直に消化する胃袋を持つたものには、逆もカーライルのやうな文章は書けない筈。それならば唯だ胃弱でさへあればカーライル風の文體が出来るとか云へば、さうは往かない。今云つたやうな、動じない強い氣質、始終喧嘩でもやらうと云ふやうな氣質に加へて、少し胃弱が混つて居ないといけない。さも無ければ、鬼を捕まへてギューと言はせる如き、鐘馗見たやうな文體は出來まい。日本の普通の文學者には、カーライルの文體などは、眞似をしやうと言つたて逆も覺束ない。胃弱だけは眞似が出來ても、あとが六ヶ敷い。乃公が堂々と世の中を渡るに何が悪いか、何でも反對するものは蹴

飛ばして行くぞと云ふやうに、意志の強い、確信ある人格を具へた、鬼をも採殺す氣力がなければ、幾ら筆の尖を捻くつたて書けるものではない。僕の如きものでも、時々文章はカーライルの真似をして居るとか評されることもあるが、決して真似の出来ぬことは萬々承知である。

僕はカーライルの爲に靈魂病を幾らか治療して貰つた。今とても全く靈魂健全と云ふでは無いが、若しカーライルが無かつたなら、今頃何處に往つて居るか知れないのである。今日生きて居ると云ふだけが、既にカーライルの賜である。そこで何等の點に於て此効能があつたか、それを二つ三つ擧げて云はう。

◎世の中は眞面目なもの

第一には、世の中はジミなものである、輕々しい才子風では、なか／＼以て世間を渡れるものでないことを大いに教はつた。能く西洋にもあるが、殊に日本の

學生間には、所謂當世風の才子で、彼方此方の人の氣に障らないやうに、好い加減にも辭儀でもして、幫間的に、藝者的に、自分の主義も何も無しに、好い鹽梅に世の中を胡麻化して渡らうと云ふものが往々あるが、カーライルは、ソナナ事では本當に世間を渡れるものではないぞ、世の中はジミなものであり、眞面目な奴が一番に勝利を占めるものであり、且つ自信の強き者が一番勝つと云ふことを教へた。併し之を悪い意味に取つては困る。何でも強くさへあれば構はないと云ふのではない。自ら信ずる念の強いだけに、眞面目に世に處する覺悟がなければならぬと云ふことなのである。

◎強い人

カーライルの叙事文の豪いのを非常に感じたことがある。かの『佛蘭西革命史』を讀んでも、随分強い奴が澤山に現はれてゐる。名からして縁喜の悪るさうなダ

ントンが、斷頭臺で首を切られるところを見ると、彼はデモランと最期を共にしたが、デモランは、日本の政友會などに有りさうな人物で、氣の利いた、キリツトした男、ハイカラ風の紳士で、而も顔付は生白い、なか／＼の好男子、立派な男だ。ダントンは之に反し、顔と云つたら、日本で謂ふと船頭的の俠客に有りさうな濼い面をして、體の大きなドッシリした男、重々しい奴。それで兩人が白洲に出て名前を聞かれると、デモランは、我輩の名はデモランだと云ふ。何歳だ。我輩は三十三だ、三十三と云ふと、世界で大革命を企てた者が兎角死刑になる年齢だ、などと強さうに言つて居る。又た一方のダントンの答は、乃公の名を知ら無いのか、ダントンと云ふ名は此革命で知れ渡つて居る筈だが、貴様はそれを知ら無いのか。今にも首が喪くなつたら、乃公の姓名は歴史に残るばかりだ。ナニ住居は何處だと。地球が乃公の住處だ、なんぞと愉快に言ひ放つて居る。サア愈よ斷頭臺に登つて行く時分に、えらさうなデモランの方は女房が來て歎いたら、

共にメソ／＼と泣出したが、ダントンは、泣くな泣くな、我慢しろと言ひつゝ彼を慰め、シテ愈よ別れる時に、之が別れだぞ、今度逢ふ時は斷頭臺で首が逢ふのだぞと言ひながら、ダントンは斷頭臺に登らんとした際、急に聲高く泣出して、ア、我が妻、我が妻と、妻戀しがるかと思ふと、直ぐに、ナニ、ダントンともあるものが斯んな弱いことで何うするかと、自ら責めて勇しく臺に登つて、首をヌトーンとやられる所を書いてあるが、あゝ云ふ強さ加減の筆法はカーライルに限る。又た彼のミラボーが、議會に於て宮中の使者を叱り飛ばす所の文章などは實に痛快である。尤も此等は只にカーライルの筆の勢が強ければかりてはなく、人間共者がさう云ふ強い人であつたのを、強く描いたのである。

◎剛にして又た柔

『サルトル、レザルタス』を讀んでもさうだ、強い所が澤山にある。此世の中を

渡るに、何をグヅラ／＼と匍ふやうにして渡るのか。昔の哲學者ゼノは、世の中の艱難辛苦を足の下に陥みつけて渡つたぢや無いか、然るに今日はゼノよりも一層高尚な教を受けて居る我々だから、人生の艱難辛苦を我が肩に負つても、喜んで世の中を渡ることが出来ると説く所は非常に強い。又た所に依つては極く柔和である。ちよつとカーライルを見ると、柔かい所は少しも無いやうであるが、能く味はうと、非常に優しい所がある。

今日動もすれば、基督教徒の中などには、愛とか何とか言つてベタ／＼になる柔かい奴がある。無暗に世は涙、ア、人世は涙なるかなと唱へる、泣文學などと云ふものが流行る。併し唯ださう目茶苦茶に柔かでは駄目だ。人には他人が艱難してペンを搔いてゐるのを、止めるやうに勵まして遣る強い所が無くてはならぬ。然るにこの強い點が動ともすれば缺け易い。殊に基督教徒の如きには此の強い所が失せて、無暗に柔くなる傾向がある。今日では其反動としてと言つては如

何か知らぬが、兎に角それを抑へる爲めには、カーライルの著書が大いに利益ありと思ふ。同情は頗る良い、でも唯だペンを搔いて居るばかりでは役に立たぬ。乃公は如斯き決心である、如斯き事をするのであるぞと、自己の意志を世間に發表する。さうすると傍から邪魔をする者がある、其時には。ナニ構はない、邪魔をするものは蹴飛ばして行け、二三人蹴飛ばせば、後の者は自然と退いて仕舞ふ。さうして大手を振つて世の中を渡らうぢやないか、と云ふのがカーライルの教へる處だ。是は僕の誤解であるかも知らぬが、實にさうだと思つて居る。だからカーライルの僕に教へた第一の事は、世の中を渡るに、所謂今日のやうな才子肌では通らない、頗るシミにし無ければならぬ、眞面目な考を以て、強く世の中を渡らなければならぬ、唯だ泣いて居るばかりではいけない、何事にも屈しない勇氣を持つて進まなければならぬと云ふことである。

◎理想と實在

モウ一つカライルに習つた事がある。それは理想と實在と云ふ區別が、段々薄くなつて來る一點である。實在(Real)と理想(Ideal)との二つは、左程區別のあるもので無いと云ふことである。是はチヨット可笑しいやうで、普通の解釋を以てすれば、理想なるものは決して達すべからざるものであり、到達し得べきものは理想でない。人間の限りある力を以て、限無き理想に達することは不可能だとしてある。手よりも頭の方が遙か遠くに働く、頭では千里向ふを見ても、手は三尺位しか先さへ届か無いやうなものだとしてある。理想と實在とは論理上正反對なりとは、黒と白とが正反對であると同斷なりと云ふ。されど事實に於ては黒白の間に、又た鼠色があるては無いか。日本人の頭は兎角論理に負け易い。白て無ければ黒、黒て無ければ白と言ふやうな譯で、其間に鼠色のあることを忘れる。

丁度それと同じく、理想と云へば實在の反對であるとして仕舞ふ。然るに僕がカライルに學んだことは、其理想の中に實在なるものが含んで居り、又た實在と云ふ中に理想が含んで居ると云ふことである。つまりない事でも能く之を觀るから、其中には理想が幾らもある。殊に子供の所作などは、詰らない事のやうではあるが、其の無邪氣にして天真爛漫たる中には、實に何とも言へない理想が含蓄されてゐる。今日の日本人——殊に學生——が自殺でもしようと思ふ程に、兎角失望し易いのは、即ち勇氣が缺けてゐるからで、なぜ勇氣が缺けるかと云ふと、自分の理想ばかりが高くなつて仕舞つて、實在が之に伴は無いからである。イツソ死んだなら理想に合するかと思ふのであるが、ナアニさうは往かぬ。青年が、未だ世の中の艱難辛苦を嘗めない先に、敵の旗標を遠くからチラト見て、乍ち人生と云ふものは斯くも恐ろしきものだ、サア逃げやうと、ベター／＼になつて、平家の腰拔武者をさめる憶病者もあるが、其の然る所以の重なるものは、彼等の

理想に實在が結び付けられぬからである。

カーライルの教ではソナナ弱い事を云はない。理想なるものは、必ず自分が實際に當らなければ、眞味が分らぬと教へると同時に、どんな實在でも、其中に理想を含んで居ると言ふのである。例へば手を舉げる、手を舉げるのは造作も無いが、併し手を舉げたり下げたりするに就いて、細かに考へて見れば、地球の中心も亦た其通りに動いて居る。地球の表面に吾々が居て、上に異動があれば、其中心も亦た動く。どんな小さい物でも一寸動くなら、地球の中心點も直に動くと考えた日には、大變に大きなものである。吾々の行動はどんな些細な事でも、其中に大原理を含んでゐる。リヤルの中にアイデアがある。それと同時に、其理想と謂ふて居る所のものが、實行に現れなければ分るものぢやない。いろいろと八釜しく忠孝の理窟を言ふものがあるけれども、孝とは親に孝をすれば良いので、『抑も孝なるものは、なんぞといふ議論を必要とせぬ。孝の理想が分りたいな

ら、父母に孝を盡せば其れて解る。父母に孝を盡すにはどうするか、暑い時には煽いでやる、寒い時には暖くしてやる、さうすれば孝經を百遍讀むよりも、孝のアイデアがズット能く分るのである。

◎ 品格と品行

又た一つカーライルの僕に教へたことは、人に貴ぶべきことはキャラクターであり、人の藝と云ひ、品行と云ひ、之をキャラクターに比ぶれば、甚だ輕きものであるとの一條である。尤も爰で青年諸君に誤解の無きやうに願ひたい。品行方正は素より必要なことである、それは守つて貰ひたい。けれども唯だ品行方正ばかりを八釜しく言つて、其根本を忘れることが間々ある。人によつては極く賤しい動機からして、品行方正にして居ることが出来る。遊廓に遊ぶことを例に取ると、或人が遊廓に遊ぶと、あの人は品行方正ぢやないと言ふ。又た或人は遊廓に

行かないと、それで其人は方正かと云ふに、尤も其點だけは方正であらう。けれども彼は何故に行か無いかと質すと、金が無いから行かない者もある。然らば決して方正だからと云ふ譯で無い。又た中には往きたいが、どうも親父が睨付けて居るから往かれないと云ふ者もある。或は上官がやかましい人だから、知れると悪いて行かぬと言ふ者もある。して見ると此品行方正と云ふことは必ずしも人格の高さを示さぬ。動機と之に由つて生ずる行爲とは、丸で反對な事がある。極く吝嗇な奴が一番大儲をしようと思ふばかりに、殊更に寛大に見せ掛けることもある。其人の動機を知ら無い者は、あの人は寛大な人だと賞めるだらうが、其實彼の精神はモウ一層金儲をしようと思ふのであるから、此人は依然として吝嗇なのである。如斯く人を評する時に、其外面に現はれた品行のみを見て、其品行の動機を見無いと、決して其人の眞價が分らぬ。

そこでカーライルの著書を見ると、是れまでは甚だ品行の善くない人、道徳上

善くない人であると云はれてゐたもの、事を、大層譽めて居る。例へば、以前にはクロムウエル程の悪黨は無いと言つてゐたものだ。然るにカーライルは筆を極めて、クロムウエルは偽物や野心家で無いと斷言した。それで近頃は初めて、成程クロムウエルは眞の豪傑である、又た善人であると分つた。佛蘭西革命の人傑ロベスピアと云ふ奴は品行方正で、どんな誘惑に遇つても迷は無い人で、殊に謹直な人であると世間では評判したが、カーライルが此男を見ることはどうであらう、悪口を極めて居る。ヒョロ／＼した瘠ッぽち男のロベスピア、彼奴は物の輕重、事の本末を知らぬ、小膽なる偽君子だと罵つてゐる。彼奴は死ぬる時までが碌な死様を爲さない。ピストル往生を仕損ひ、塵埃を運ぶ車に載せられて、軀が車から半分落ちかゝり、衆人の怨恨の聲の中に、巴里の市街を引廻はされた。死に様まで、ダントンなどは雲泥の違ひで、ロベスピアの如きは實に卑しむべきものだと言つて居る。されど彼の品行は甚だ方正であつたのだ。

彼れに反してミラボウ——あんな筈棒な男は無いので、自分の金を自分の金とは思つて居ない。其代り自分に無ければ人の物でも取つて使つて仕舞ふ。さうして金なら兎にも角にもだが、人の女房まで彼方此方引張つて歩いた男だ。牢屋から出て來ても、大きな顔をして、ナアニ平氣なものだ。此男は法律にも何にも懸らない奴だ。さうして大きな蛙のやうな面付で、而も痘痕面で、おまけに皮膚病だ。あれでどうして他人の妻君を引ツ張つて歩けたかと思はれるやうだ。或人曰く若し此ミラボウにして品行方正であつたならば、佛蘭西革命は起らずに濟んだらうと。して見ると矢張り品行方正は、國家の爲め個人の爲め、怠るべからざるものである。併し同時に品格と云ふものを重んじなければならぬ。品行方正ばかりで往けるものではない。品行方正のモットの奥がなければならぬ。品行は外に顯はれる門構である。門が嚴肅なるよりも、奥がズット清潔でなければならぬ。彼のロベスピエは門構が立派で、奥が甚だ汚かつた。ミラボウの方は奥がチャン

ト備はつて居て、其代りに門の前には塵や肥溜があつたのだ。品行方正は宜いけれども、それが爲めに人間が小さくなつてはいけない。何の誰は藝者買をするから、モウ逆も濟度すべからざる者だ。何の誰は酒を飲む、酒などを飲んで駄目だと、動もすると人間を小さなものにして仕舞ふものもあるが、僕のカーライルに學んだことは、そんな局量の小さなことで無い。抑も奥が正しくして、而して後に表の品行が方正になるのである。

◎カーライルとゲータ

カーライルは、如斯き教訓を與へた人物で、嘗に自分の時代の煩悶を解いたのみならず、今日の社會にも其思想を活動させてゐるが、彼は抑も何處からして、左様な大きいインスピレーションを得たのか。彼は胃弱であつた、されど頭腦が甚だ明晰であつた。數學は最も得意であつた。けれども矢張り我々と同じく、青

年時代には大に煩悶して、いろ／＼の迷が起つて、彼方へ行つては糧を求め、此方に來ては藥を求めるやうにして、其中に彼の獨乙のゲーテの名を聞き、其著書を開するに至つて、丁度僕のカーライルに於けるが如く―但し段は違ふけれども―兎に角同じやうな理由で非常にゲーテを信仰した。初めてゲーテに贈つた手紙には、ゲーテを神の如くに崇めて、私は目下職が無くて困つて居る、某大學で物理學か數學の教師が入ると云ふので、その候補者となりしも成就せず、今度また或大學で文學とか、哲學とか、倫理とかの講座の教授が欲しいと申しますから、私は其候補者に成りますが、此に於て貴君から一言のお手紙があつて、私を推薦して下さいと、私は大層好都合で、飯に有付けますによつて、どうか宜しく御願ひ申しますと云ふやうなことが書いてある。或時ゲーテから小さい包を贈ると、其受取の手紙に、貴殿からの小包が郵便で届いたから、今それを開けやうと思つて、其前に上包から研究して見るに、大層體裁好く結んであるが、之を結んだ人

は誰であらう、定めて令夫人の手に成つたのであらう、さうと思へば之を解くのが残念である、など、大變に優しいことを言つて居る。カーライルのゲーテに贈つた手紙には、實に讀んで居て愉快なものがある。又たゲーテの方でもカーライルに對し、或時は自分の弟子に遺るやうなことを書くかと思へば、今度は頻りに尊んで、英吉利にも、君の如く予の思想の分る人があるとは誠に満足だなどと言つて居る。カーライルはこの通で、初めて自分の師匠とも稱すべきゲーテを得たのである。

◎ゲーテは大なり

ゲーテの品行に就ては、どうも面白く無いことが澤山にある。彼は頗る多情な人であつた。彼の内幕を書いた書物もある。又た或本には、小兒よりゲーテに贈るに擬して書いた書簡があつて、口にも出せないやうなことを澤山に認ためてあ

る。其書中には彼を神の如く呼び、『オー天に在しますゲータよ』なんて書いてあつて、正しく狂婦の業に似てゐる。ゲータは決して品行方正とは言へない。且又カゲータは、金満家で、貴族で、その上に學問が出来る。其學問も哲學とか何とか云ふやうに定つて居ないで、物理學、天文學、或は博物學など、何でもかでも出来た。ニュートンの光線説を攻撃した議論は有名なもので、また理學上に幾多の効績を立て新発見をなし、科學の大家としても史上に其の名を遺してゐる。今もフランクフォートにあるゲータの家に行くと、彼の採集した礦物や、植物や、動物の標本が陳列してある。ゲータはその上に政治家で、ワイマル大公國の總理大臣を勤めたことさへある。さうして美術上に於ても、自分で彫刻した物が今日も遺つて居り、また書も書いた。かく非常に多藝な人であつた。かくの如くにゲータは金も有り、學問は何でも出来るし、而して位もあり、權力も有り、而も美男子であつた。此等の點はカーライルと大變な違ひだ。それに又た堅固な品格の

人であつた。世の中にあの位備はつた人は先づ少いと思ふ。けれども今云つた通り、品行といふ點に就ては、決して備はつた人で無かつた。でもカーライルは、所謂微瑕細瑾に氣を留めないで、唯だ大體の點に心を留めた故に、之は豪い人だと思つたのである。凡そ沙翁以來三百年間、此世界にゲータに及ぶ人は出ない、先づ今の人間の思想を治めて居るものはゲータである。けれども今ゲータの事を言つても凡人には分らないから、云ふまいなどと豪いことをカーライルは言つて居る。さうかと思ふと、又たカーライルの日記を見れば、ゲータの『ウイールヘルム、マイステル』を翻譯する時分に、或個處では是は怖ろしい程高尚なものだ、實に神の言葉か、天使の教訓かと思はれると言つて居るかと思れば、扱て又た其次ぎになつては、頗る下品な事の書いてある處に來て大に憤慨し、本を叩き付け、こんな不潔なものはモウ決して翻譯せぬぞと言つて、踏み付ん計り怒つてゐることもある。

② ゲーテとシルレル

ゲーテは太洋の大にして、清濁を併せ呑むやうな人であつた。其大や測るべからずで、僕の如きは甚だ面目無いけれども、逆もゲーテを量る事は出来ぬ。カールは、人は三十までがシルレルで、其以上にならなければゲーテは解らぬと言つたが、僕は四十になつても、未だにシルレルの方が宜いやうな心持がする。先年獨逸の或文學者に逢つて、此通りの事を歎息したら、其人が、それは失望しないでも宜い、獨乙人でも四十五になつて、やはりゲーテよりもシルレルを崇拜するものが夥多ある。一體シルレルの方が品質が好いので、彼は早く死んで、さうしてゲーテのやうに多藝でもなかつたが、其思想の品格を比べると、シルレルの方が優つて居るのだ。唯だシルレルの思想は、急に絶壁をして嶄然と峙てる山の如き故に、いかにも崇高に感ぜられて、一見達し難いやうだが、之に反して

ゲーテの方であると、自然々と高まつた山のやうで、登り易く平凡なやうではあるが、又た平地を歩む如くにして進めば、遂に頂上に達するのである云々と云つて慰めてくれた。

ゲーテは品行の修らなかつただけに、此世間の俗な所はシルレルよりも確かに能く知つてゐた。シルレルの一詩に、河があつて、其對岸に我が理想がある。此河を渡らうとするに船が無いと言つて歎く所があるが、これはシルレルの理想の如何にも高い所を示したものである。ゲーテは餘程俗であつただけ、世人はシルレルよりもゲーテの方に登り易い。普通一般にはシルレルよりはゲーテと云ふやうであるが、カールはシルレルに言はせると、ゲーテは近世無比で、獨り十九世紀のみならず、十七世紀、十八世紀、十九世紀と、斯う三世紀に跨がつて、彼れほどの人物は無い——或は二十世紀にも斯人の右に出る人は現はれまい——マア此の三百年間に、ゲーテ程の人物は無いと言ふのである。

●ゲーテの大思想

彼はつまり、人生をジミに見て、浮いた薄ペラなものでは無いとし、いと小さき物にても意味があり、其中には謂はゞ神の働があることを教へた、尤も之れは耶蘇教の神とは違つて居るかも知れぬ。エツケルマンの手紙か何かにあつたが、或る人がゲーテを訪て、談基督に及んだ所が、基督は神聖にして語るべからず、かれは神の宮で、人心の艱難苦勞を表はしたものであり、此神殿の扉は漫りに開くべきものでないと云つたさうだ。さればゲーテの所謂神は、通常基督教で云ふ神とは大分異つて居るかのやうに思はれる。兎に角に、吾々は才子的に、ヒョコくして世の中を渡れるものには無い、眞面目でなければならぬと教へた。彼の名言に、身を殺して後初めて生命興る、己の爲めに出来て居る此の己の身を捨てて、人間は生きるものであると云つた。之は至極眞面目な教である。世界がさう

出来て居て、それで世界と個人との間の調和が取れると云ふのは、道德の法則を破らずに、世界の法則に適ふやうにして行くからで、其の法則に適ふには、此世には「The Divine Idea of the World」(世界の神想)がある。それを悟らずにウカく世渡りしては眞の人生は味はへぬ。ゲーテの詩や他の本を読んでも、處々に随分穢いことが書いてあると思つても、ズツと讀み了つてから其本を伏せて見ると、此世の中がズツと廣くなつたやうな心持がする。僕はゲーテの本をあまゝ讀まない。たゞ彼の傑作『ファウスト』は十遍ばかりも讀んだが、『ファウスト』の中には、随分怪しからぬと思ふことが屢々ある。或は魔法使見たやうな者が出て來たり、悪黨が出たり、甚だ不快に思ふことがあるけれども、又た狭い意味に於ける品行と云ふ點からは、非難すべき點も少くはないけれども、之を讀み了つて回想すれば、他人はいざ知らず、僕の心持はズツと廣くなるやうに感じ、人生とは斯うしたものかと悟るのだ。人をして人生は貴い、人として生けるものは、

乞食同然の賤しい者でも、何程つまら無いものでも、矢張り之は人間であると尊んで、それどころ、始めて世の中の調和が出来るものなど、寛大なる悟道に入らしむるのは此人の教訓であつて、而して此の大思想が實にカーライルを起した所以だと信ずる。

そこひ無き淵やはさわく山河の

素性法師

淺き瀬にこそ仇涙は立て

すゑつひに海となるへき山水も

伴 商 賤

しはし木の葉の下くゝるなり

地方の研究

地方はチカタと訓みたい。元は地形とも書いた。然しチカタは地形のみに限らず、凡て都會に對して、田舎に關係ある農業なり、制度なり、其他百般の事に就きて云へるものにて、夫れを學術的に研究して見たい考で、謂はゞ田舎學とも稱すべきものである。

近時都會の繁榮は盛んなもので、其が爲に田舎は次第に衰頽を來すが、之は交通運搬の便利が益す開けて來る結果である。殊に鐵道が縱横到る所に布かれ、我國の鈍い汽車でも一時間に二十哩を走つて居る故に、東京市の如きは年々の擴大を致すのである。されば一時間能く百哩を走り、更に進歩したら二三百哩位は走らぬとも限らぬ、完全なる汽車を我國に敷設したらドウであらう。都市は愈よ膨

賑するであらう。ウエルスは曰く都會が斯く開けて行かば、倫敦の如きは遂に二千萬の人口を有すべく、市俄高、費府は四千萬に達すべく、漢口の如きは水陸の交通器關さへ發達したなら、西伯利亞からでも、南洋からでも、諸方面から最も集り易い地形を占めて居るので、恐らく世界最大の大都會になるべきだと言つて居る。斯かる時節が来るか、來ないか、之は豫言が出來ぬけれども、兎に角、各國とも都會の繁昌は迅速で、田舎が段々度外視せられるやうに成り行くのは、大に憂ふべき事である。

物徂徠の『政談』や、『太平策』を見ても、都住居は大に攻撃してある。即ち都は宿屋的住居で、都人に恒住の志無く人心も落付かぬ、身體も柔弱になる、地方に行つて武を養へと勸めて居る。徂徠ばかりではない、昔は總て、『江戸に家を持たば三代は持たぬ』と云つた。之は西洋でも同じ事で、羅馬時代から『都會は國民の墓である』と云ひ、コクネーの倫敦子は、子供は必ず田舎から貰へなど云ふこ

ともある。併し今は昔と異なり、衛生の設備が整つて、都會とても田舎の極悪い所よりは良からうかと思はれるが、今日の如くに、人が都會にばかり集まつて來ては心配に堪へぬ。

田舎には滓ばかりが残りはずぬかと思ふ。愛蘭土の如きは健康な人間が皆他國へ出稼に行つて、跡には瘦せた老爺さんと、豚のみが残つて居る有様。日本でも同じ事、今のやうに東京にのみ人が集つて來る日には、田舎には老人か、墮落書生か、非職官吏位しか居らぬやうに成らう。茲に至つては其害の多きを認めねばならぬ。

都會の子供は伶俐なり、然れども物事を遣り徹す信念が薄い。田舎の子供は之に比すれば鷹揚で、言はず小馬鹿である、然れども信念の堅い所がある。都會では朝から晩まで五官に觸るゝものが多いからである。町を歩けば、電車が來る、馬車が來る、人力車が來る、人の往來が劇しい爲、子供も五官が非常に鋭敏にな

る。詰り其等を避くる爲めに敏捷に成るやうなもので、之を心理的に考へたら、一方には感心だが、其機敏なるは即ち防禦のために然るのである。故に人に對するにも怜悯であるが、物事が少し六ヶしいと、又た避ける。即ち怜悯なのは薄ッペらな、上ツつらな怜悯で、ドツシリした所が無いのである。之に反して田舎の子供は、ボンヤリして居ても、確かりした所がある。第一、目に映ずるものが、木や、草や、山や、空くらゐのものだから、車や人間を避ける事が少い。ブラドレーの云へる如く、田舎にては生命あるものに接すれど、都會にては然らず。即ち都會では、建物が立派だとか、呉服屋の飾りが奇麗だとか、物質的の物が最も多く五官に觸れる、無論先きにも云つた通り、都會では人に接する機會が多くて、も此等と交際するので無い故、人も殆んど物質的と成る。田舎では牛だの、馬だの、蟲だのと活きた物を多く見る。常に山水に交はると言つてもよからう。死んだものと、活きた物と、例へば椅子を見るのと、蟲を見るのとは、大いに

感じが違ふ。椅子を見たからとて、別に感じも起るまいが、蟲を見るとすれば、ア、蟲が動き出した、是れから又たどう動くだらうなどと、其行先を考へる力がユツクリと働く。即ち田舎では五官に觸るゝ物が少いけれども、落ちついて性格を堅める事が出来る。故に都會には小才子が澤山出来るかなれども、勝れた人物は田舎にしか出ない、僕は日本の子供と西洋の子供とを試して見るに、日本の子供に向つて、其コップをナセ持つて居るかと思はれると、大抵ナセでも持つて居ると、斯う答へる。之を西洋の子供に問へば、暫く腦を痛めて其説明を考へるのが常である。都會と田舎との小兒の差異も、斯んなものかと思はれる。

されば田舎の衰微は、決して農業が衰微するばかりでは無い。第一、人間の品格を高くする事が出来ず、又た自治制の發達も出来ぬ。此他種々の關係がある故に、決して田舎を度外視せず、田舎に對する趣味と同情とを養ふて、諸君と共に之れを科學的に研究せんと欲するのである。即ち彼の生物學者が顯微鏡を以てバ

クテリヤなどを研究するやうに、其方法を藉りて之を社會學に應用して見たい。米國のアダムスは米國の憲法行政を調ぶる時に、先づ小さな自治團より調べよ、即ち村なり、郡なりを調べよと言つた。恰も一疋の虱でも、動物たる諸機關を悉く備へて居る如く、小を以て大に伸ばせば、夫で宜いのである。詩人テニソンは小さき一輪の花を取つて、此花の研究が出来たなら、宇宙萬物の事は一切分ると言つた。即ち一葉飛んで天下の秋を知る如く、一村一郷の事を細密に學術的に研究して行かば、國家社會の事は自然と分る道理である。

或人が、クヴィエーと云へる動物學者に、化石せる動物の脊骨の一片を持ち來りて、如何なる動物なるかと尋ねた。先生之を熟視して、斯る脊骨を持てる動物ならば、頭は斯うて足は斯うてなくてはならぬと、一片の骨から割出して、其の全形を圖にして與へたさうな。然るにそれより數十年の後、同じ動物の全形の化石が出たが、之をクヴィエーの圖と合せて見たら、寸分も違はなかつたと云ふ話が

ある。學問の研究は斯の如きもので、一村の事を研究すれば、推して郡を知るべく、縣を知るべく、而して政事でも、社會でも、自から分る道理で、日本も、帝國主義も、之れから割り出し得らるゝのである。

近頃の教育社會では、頻りに地方教育ハイマイトクンデーを鼓吹して居るが、獨逸などは殊に此の方針を取つて居る。故に東京近在で地理を教ふるにも、富士山とか、大井川とか云ふ縁の遠いものを教へずに、先づ其村の岩とか、近所の山とかを教へ、川なら小川でも可いから、其村を流れて居るものから教へたい。歴史も其通りで、東洋歴史よりも、先づ村の歴史を教へたい。或は地方によりて悪い習慣もあらうが、何か良い事も必ず有るもの故、それを子供の腦髓に詰込んで置くと、自然と其土地にインテレストを持たすやうに成る。又た經濟學を教ふるにしても、先づ粒々皆辛苦と云ふ事から注入して、其村の米の出來高は何石で、其價は幾何などと、事實に基いて教へると、忘れる事が無いのみならず、知識が活きて來る、而して

之れよりして天下の經濟に推及ぼすのだ。彼の有名なるローゼルスローズルスの農業沿革史は、非常の大部で、自分一代では出來上らずに、息子さんが之を完結せしめたものであるが、其材料は皆小さな村々より出たものである。

又た田舎には舊記も澤山に残つて居る。随分昔の事を知つた老人も残つて居るから、彼等に尋ねたなら、必ずや面白い材料がある。即ち舊家の記録や、隨筆物や、或は村鏡と云ふやうな村の記録、或は年貢を納めしむる爲の村役場の所謂水帳、明細書、其他の帳面などを調べたなら、必ず制度の變遷、風俗習慣等の研究に資する所が多からう。それに又た地名には歴史を含んでゐる。英國でもボルグの名の附く所は、必ず昔の城のあつた處であるやうに、日本でもそんな關係がある。併し元明記和銅六年五月の條に載せた、郡郷の名には好字を著すべき詔ありし結果、分らなく成つて居る事もあらうが、夫れでも風土紀や、名所圖繪のやうな物を調べたら、良き材料を得るに違ひない。帝國大學から出版した、彼のチェ

ンバレン氏のアイヌ語研究の書を読んで見ると、富士だの、伊豆だのと云ふ地名は、アイヌ語だと書いてある。僕が四國に行つた時、井田とか田井とか云ふ地名が多く、殊に海岸に近い所にあるから、研究して見ると、其土地の或書に、其處等は昔井田の法を實施した土地であると書いてあつた。

僕は又た久しく、日本の家屋の建築法を調べて見たが、奥州の果から鹿兒島の隅まで殆ど同一の建築法である。大和民族の標準的家屋と云ふものは、何れも横長い家で、始めに土間があつて、次が板間、奥が座敷と云ふ構造で、入口は必ず土間の所に在る。是より段々上等の家になると、壁を以て其區劃を多くし、即ち部屋を澤山造る爲め、次第に土間が狭くなり。遂に土間が玄關と進化する。生計の程度と土間（一名庭或は中庭）とは反比例に進む。斯る家屋は世界に類を見ざる構造で、諾威の家屋が稍之に似て居るが、併し入口は真中に附いて居る。兎に角此建築法が日本全國を支配して居る事は、如何に我々の祖先が感化力を持つ

てゐたかと云ふ事の研究にもなるであらう。

獨逸のマイツェンは、今日云ふ獨逸國に、昔は如何なる民族が住んで居たかと云ふ事を、家の構造より研究した結果、即ち露國の方に近寄つた所の民族は、矢張ラズツ人種であつた事が分り、又た西の方のは地形上佛國との關係があつて、ケルチック人種であり、而して純粹の獨逸人即ちチュウトニツク人種は、中央に住んだ人民であることを断定した。

又たマイツェンの説に、スラヴ人種の村落は、寺を中心として、圓形村を造つて居るか、又たは東海道見たやうに、長い村を成して居るストラーセンドルフ（家續）である。又たケルチック人種の村落は家立ちがマバラであつて、毎戸孤立である。又た中央のチュウトニツク人種のは支那人風の村落的で、群を成して居て、ハウフエンドルフ（群集村）であると云ふ事だ。又た僕がカナダに行つた時、その河畔にある町村が、非常に長く幾町もあつて、其間に又た細長き畑地を

交へて居るのを見て、此處の移民は必ず佛人であると云ふ事を推定した。即ち佛人は交際的人種で、畠を耕すにも、尙ほ其近隣との交通を圖つた爲め、家屋が皆密接する、英人のやうに個人的で無いから、村落の恰好までが、自然に斯うなつたのである。扱て日本の村落の形は餘程崩れて居るから調べにくいが、兎に角かう云ふ風に研究して行くと、頗る興味があらう。

又た土地の分割法を研究せねばならぬ。之は内地では遙か昔から亂れてゐて、研究の餘地が少いだらうとは思ふが、昔百石の士に與へた田地の理想的標準分割法は、二三五法などと稱して、記録には残つて居るが、實地に調べて見ると分らない。享保年間までは、田地を賣る規則がチャンと定まつて、細く切れくに賣る事は出来なかつたが、其後此規則が無くなり、無闇と切賣をしたらしいから、遂に昔の土地の分割の様子が段々分らなくなつて來た。されば地租改正の時、檢査に際して、或百姓が我が土地を簀一枚で隠さうとした滑稽談もあるくらゐだ。

又た彼の支那の井田の法の如きは、書物の上でも調べ、實地に就て正しても見だが、更に其の事實を得無いのみならず、其痕跡が支那には少しも残つて居ない。夫から考へると、此井田の法なるものは、實際行つたものか何うだか、頗る疑はしい。恐らく支那古賢の理想のみで終つた事ではあるまいかとも思はれる。

又た方言の研究を爲す事が、地方研究の一部である。歐羅巴各國は勿論の事、彼の萬事進歩的なる米國でさへも、近頃は大に郷里的文學が流行つて、其土地の事は方言で書かねば、人情を寫す事が出来ないなど、言つて居る。我國でも方言は大に研究すべきもので、之が歴史の研究になる。縦へば奥州へ行くと、山形の城邊に住んで居る一區劃の人民は、一種の方言を使つて居る。之は曾て他藩より轉封された國主に附從して來た家來どもが、一個處に住居を占めてゐた爲、今日迄も其流風遺俗が残つて居るのだ。斯う云ふ風の事を調べるのも亦た頗る興味がある。

言語については、俚歌童謡の研究も亦た必要である。ビユウヘルの如きは、音樂は抑も勞働から出たものだと言つて居る。成程我國の田植歌の如きは、全く其勞働を軽くするためのもので、今でも山陰道などでは、田植に烏帽子などを冠つて歌ひ囃す習慣があつて、夫れて田を植うるに思はず手が揃ふ。又た酒を醸すにも同じ事、彼の灘の酒を造る光景を見ると、清酒は即ち歌によつて出来るやうなものだ。僕が先年瓜哇に行つた時、土人の道普請を見たが、白の如き物に棒を附けて、之を數人列をなして引き揚げ、ドシンと落しては地を固めるのだ。スルト其後に破竹を以てカチ／＼と叩いて居る者があつた。如何にも奇態だから、何かと尋ねたら、之は矢張り其カチ／＼を以て拍子を取つて居るので、即ち東京の木遣のやうなものであつた。此等を見ると、ビユウヘルが、歌は勞働より出て、而して音樂となり、又た進んで演劇となれりと論ずるに根據があるのである。

以上話は雜駁に流れたが、要するに地方の研究は、第一自治制度の參考にもな

り、又た都會は國民の體力を弱くする恐れがあるに反して、田舎は國民の體格を強め、元氣を養ふが故に、教育にも効力があるから、成るべく青年をして地方土着の思想を起さしめなば、國力發展の上に多大に効驗が顯はれるだらう。それ故に地方生活には新趣味を持たせたいものである。

ものゝふの八十氏川のはやきせに

たゞよふ波のよるへしらすも

人丸

ほのくと明石の浦のあき霧に

鳥かくれゆく船をしそ思ふ

桃太郎の昔噺

普通に教育と稱へると、只だ學校に入つて読み書き學ぶ事の様にかへるが、無論読み書きは、教育の大要素に相違ないけれども、廣い意味に於ける教育なるものは此等の事のみには止まらず、眼に觸れ耳に入るもの、森羅萬象悉く吾人が教育の要素ならざるは無い。總て是等の要素を教育的に活用し得るや否やは、我等が數百年、或は數千年前より受けて來つた遺傳の力によつて定まるのである。されば苟くも教育の事に心を寄するものゝ、決して怠らないで考ふ可きは、如何に些細な事なりとも、祖先傳來に受けて來た吾人の能力と、又た祖先傳來耳にし來つた教訓とである。

僕の思ふに、現時の日本國民が上下を問はず、吾人の生れ無い前からして、世

々の教訓として傳へられたもので、又た生れて以來成人になるまで、吾人に精神的の動機を與へたるものうちで、桃太郎の昔噺ほど有力ものはあるまい。嬰兒が漸く言語を解するやうになれば、第一に聞く話は桃太郎の噺である。而も一度や二度でなく、幾度と無く繰返されて腦裏に印像せられる。我々の親も同様、其の親も亦た同様。之は何百年前より出來た噺であらうか、兎に角人間の五代や六代どころではない、恐らく數十代以前から日本國民を養つた噺であると思ふ。同じお伽噺、昔噺と云つても、分福茶釜の如きは一地方の噺であつて、九州へ行くと此噺を知らぬものが多い。さもあらう、上州の茂林寺の事なれば、場所も定まり、又た時代もいづれ茂林寺の建立以後の事であるに違ひない。即ち時と場所とに限りある噺である。之に反して、桃太郎の噺は、冒頭にも昔々とあつて、遼たる古代を指すのみで、場所の名も掲げてない。而して恐らく全國中此昔噺の行渡らぬ所はあるまい。又た子供が喜んで之を聞く一の理由は、此噺の中には自然的

の事柄が澤山にあるからだ。例へば山の事、川の事、海の事、島の事などがある故、どんな山間に棲む小兒でも、己れの田舎の歴史の如くに思つて耳を聳て、又た海岸に産れた小兒は、遠く向ふに離れた鬼ヶ島の想像が出來ると云ふ様な譯である。それに此噺は簡單で、順序が能く立つて、美しく出來て居る、勇しく出來て居る、強い所がある、毫も嫌味は無い、極サツバリとして居る。或人は是は日本の御伽噺としては良過る、外國から來たものには無いかとさへ言つた。之は良い物は悉く舶來だと云ふ様な説であつて、チト敬服しがたいけれども、或は昔、印度又たは支那から來たものもか知れない。近頃鳥居さんの説の如くに、或は蒙古から來た者かも知れぬ。ポアスといふ人類學者に逢つた時に（此人は亞米利加西北の土人の習慣を研究して居る人である）、日本人種と亞米利加土人とは如何なる關係があるかと聞いた所が、言語上或は人種上、即ち血統上は未だ詳かならざれども、お伽噺の交通は確かにあつたらしいと云ふた。尙ほ此先生が其の時僕に

教へた事に、何處の民族でも、一番先きに交通の始まるものはお伽噺だと。果してさうならば、或は日本の桃太郎昔噺なども、善い悪いは別として、外國から來たと云ふた所で、何も國辱ではあるまい。殊に大和民族が馬來人種にして、南洋より移住せるものとせば、此噺が南洋的としても、日本固有と云ふのも同斷だ。只だ僕の此處で云ふて置きたい事は、此噺は他の噺と比較するに、少しく性質が異つて居つて、趣味があると思はれることである。

一説に此噺は道真卿が筑紫へ流されてゐた時、土地の子供を集めて教へられたものだと言ふ。此説の如きは頗る面白い。成程道真卿の口からなら、此のやうな噺も出やうと思はれる。此噺の中の事柄は、餘程支那の歴史や文學に據つた所があるからして、道真卿くらゐの人でなければ、チョット創作せられぬかとも思はれる。尤も噺の筋が簡單であるから、色々疑問點を付すべき事件が澤山にある。これを少しく研究的に考へたならば、甚だ仕組が纏まらぬとの觀念も起るであらう。

う。歴史家が探究したならば、實に不審の點のみであらう。第一に年號が明らかで無いとか、第二に場所が判然せぬとか、第三に此の老爺と老嫗との名が知れぬとか、第四に桃太郎が如何なる理由で遠征を思ひ立つたのか、其動機が分らぬとか、其他此昔噺の仔細を糺せば、解し難き事が數多出て來るのであつて、近頃の獨逸學者風に、顯微鏡的に之を詮索したならば、不満足極まつたものであらう。併し歴史と昔噺との異ふ點は此所で、桃太郎はお伽噺で、歴史では無い。歴史は具體的、お伽噺は代表的である。歴史は客觀的で、お伽噺は主觀的である。

僕は物好きに桃太郎に關係のある古い書物を集めて見た。まだ七八冊しか集まらぬが、何れも古いものであつて、其中最も古いのが二百餘年前の出版である。其本には桃太郎凱旋後の事が書いてある。例へば寶物を持ち歸つて、老父老嫗を大いに喜ばせ、犬、雉子、猿にも分捕品を分ち、自分は元服して女房を持ち、安樂に暮して居た所が、鬼ヶ島では寶物を取られて仕舞つたので残念がり、どうに

かして此の仇返をせんものと協議の末、遂に鬼の娘をば桃太郎家の召使に住込ませ、桃太郎の隙を見て刺殺せと命じた。然るに鬼の子とは云ひながら、桃太郎の家に住込んで見ると、流石一家團欒の様子といひ、且つは桃太郎の人格の高きに敬服して、どうしても刺し得ない。刺さなければ親に不幸、寧ろ吾身を棄つるに若かずと思つて自害した。其兇報に接した親鬼は、大に悔悛して出家した。世に謂ふ『鬼の念佛』とは、之から起つたなど、云ふ話が出て居る。

又た或一書には、桃太郎鬼ヶ島征伐の動機を述べて居る。其説に據れば、或日桃太郎が山へ木を伐りに行つた際、恰も春深うして櫻花爛熳と咲き亂れ、櫻狩に來る人が群を成してゐたが、其中に村の長者の娘が居つた。桃太郎は此美人を見初めて、嫁に貰ひたいと申込んだ。然るに長者は、貴様如き小百姓に遣れるものと云ふて大いに嘲弄した。其處で桃太郎は大に憤つて、長者と吾とに何の差やある、只だ黄白の有無の差あるのみでは無いか。然らば金さへあつたなら、彼娘

を我物になし得べしと思つて、それから大奮發して鬼ヶ島の遠征を企だてたと書いてある。之は今日中國邊の海濱に居る青年が一儲する爲に、布哇或は南洋へ出稼ぎに行くのと、動機に於て異つた事は無い。否彼等が斯の如き考を起すのは、桃太郎の噺を始終耳にして居ることが、預つて力ありと云ふべきである。夫て桃太郎の噺の、斯くも永く且つ廣く傳はつた理由は、年號も場所も無く、極々漠然として、何處にても誰にても分るからである。又た只だ無意味に漠然たるにはあらずして、其中に頗る妙味の存するが故である。只だ惜い事には、此話を聞く子供に、其意味の分らない事は當然としても、之れを子供に語り聞かす老爺さん老嫗さんを始め、失禮ながら御互ひの中にも、此噺の意味を心得ない者が多い。予の探究もまだ充分で無いから、此の噺に就いては如何なる説を、誰が如何なる書物に書いて居るかは知らぬけれど、今迄耳にした所では、馬琴の燕石雜志の中に載せてあるぐらゐなもの、他には知らぬ。若し他にあつた所が、普通一般には

知れてゐないものと思ふ。僕は度々相應に學問のある人に、桃太郎の噺の由來を尋ねて見たけれども、説明を與へた者は無い。恐らく此昔噺の意味は、普通に行渡つて居らぬものと思ふ。然るに此噺の意味を解すると、解せざるとでは、物語る人の精神の入れ方が違ふ。僕は別に此意味を新たに發見した譯では無いけれども、實は十四五年前から、農業の沿革を書く材料を集めて居る中に、少しく心付いたことがあるからして、夫れを述べて、旁々世間の教へを請ひたいと思ふのである。

それで僕は、桃太郎昔噺の意味が左の三様にあると思ふ。

(一) 歴史的 (二) 倫理的 (三) 經濟的

第一の歴史的解釋は、總べて馬琴が書いて居るから、今更ら繰返す必要も無いが、其の要は詰り、爲朝八丈島遠征の寓意であると云ふ事で、此噺は保元の頃から、世に傳はつたといふのである。して見ると、チョット七百五十年前から起つ

たもので、前に述べた道實公時代よりは、詰り二百五十年後の事になる。孰れが眞説か知らぬが、先づ七八百年前から傳はり來つたものと見做して宜からう。馬琴は自分の説を確める爲に色々と故事を擧げて、例へば桃に就いても、支那の故事を引いて、桃は五木の精にして仙木であるとか、或は犬の事で言へば、昔は犬を戰爭に使つた事があるとか、雉は瑞鳥なりとか、其の他何事に就いても、和漢の古事を引證して、自家の博學を現はして居る。されど爲朝の歴史に直接關係のある證據は擧げてゐない。鎮西八郎の家來の中に、果して犬なり、猿なり、雉なりに匹敵すべきものありしか。其の從者の中に、犬太郎とか、雉平とか、猿助とかいふものがありしか、其性質の此等動物に似た者があつたか。何は兎もあれ、直接爲朝に關係した事は少しも擧げて無い。故に其の歴史的解釋は頗る面白いけれども、容易く受入れ難い。馬琴の説の據るべき所は、唯だ鬼ヶ島なる名稱は、南洋の總稱であると云ふに在るのみだ。尙ほ又た保元の頃から始まつたと云ふ事

に就いても、別に證據を擧げてゐない。恐らくは此説明は馬琴の巧妙なる想像に止まりはせぬかと思はれる。是は強ち馬琴を批難するのではないが、凡べて此伽嘶の解釋は、恐らく歴史的の證據を擧げることが出来ない故、想像を逞しうするより外致方が無いのであらう。モウ一つ歴史的想像を出せば、或は人種の移動を云ふたものでは無いかとも思はれる。例へば老爺老嫗といふたのは、古來日本に居つた民族を云ふので、アイヌなり、コロボツクルなりで、彼の川から流れて來た桃といふは、海を渡つて來た一種の民族に譬へたものではないか。元來桃といふ物が、日本在來の植物とは思へない。日本では、從來桃は百々の實が生るといふことに教へられ、日本紀には桃の木は黄泉に成長して居る様に書いてある。支那では桃を西木と稱し、又た歐羅巴でも桃の拉甸名をベルセカと云ふ。是れ即ちベルシヤから來つたことを表はして居る。而して漢字の木偏に兆の字を付けたと同然で、實が澤山なる木であつて、億兆の實が生るところから、彼の字を拵ら

へたと同様に、日本では多くの數を百々千々と稱するから、漢字の意味を寫して桃をモ、と命名したと、東雅に載せてあるが、これも當つてゐるかどうか。桃は兎に角日本の木で無い。而して桃太郎昔噺の、河へ流れて來た桃の實とは、異人種（大勢であつた故に百々と云ひしか）が日本に渡來せるに寓せるものか。又た黍團子とは、黄色人種の意か。キビの起原は黄實或は黄身ならんか、ソレとも黍は耕種植物中最も古き穀類で、原始時代の食物ゆゑ、斯く云つたものか。扱て此異人種が日本で養成されて、漸々南進し、其途中種々な民族を服従せしめたことを、種々な動物に表はしたものでないか。誰でも知る通り、野蠻人は民族に動物の名を付けるのが、最も普通の事である。殊に著しい例は、亞米利加土人中には、蛇の民族とか、狐の民族とか、又たは鳥の民族とかいふものがある通、桃太郎は犬、猿、雉と名づけた民族を引連れて、南進したのではあるまいか。

第二、倫理的の解釋では、此噺には色氣が少しも無い。殆んど男女關係と云ふ

ことが無い。女子は老嫗さん一人である。これも恐らくは教訓の爲、成るだけ艶を去る爲に、老爺さんと老嫗さんを選んだこと、思ふ。其の他全體が武張つて居る。名を桃太郎とつけたのは、桃の天々たる所をとつたのでは無くして、寧ろ其の昔から邪氣を壓伏し、百鬼を制するなどと典術にも書いてある目出度き木ゆゑに、名を之に借りたことと思はれる。而して桃太郎の誕生に就いては、或る昔話の本には、老爺と老嫗とが、川から拾つて來た桃の實を喰ふたれば、兩人とも急に若くなつて、老嫗は其の晩に子を孕んだとあるが、これでは色氣が付いて面白くない。矢張普通に行はれてゐる通り、桃の中から誕生したといふ方が教訓には適當である。

桃太郎は日本一の黍團子を兵糧とした。此黍團子と云ひ、日本一といふ事に就いては、こじつけの説を立てられぬ事も無い。兎に角子供の好きな黍團子、夫が日本一といふ以上は、最も尊重すべき性格を代表したものである。斷行的精神を

以て遠征を始めた其の途中に、二三の動物に逢つたと云ふのは、恐らく智仁勇の徳を備へることを云つたのであらう。悪く云へば猿智慧とか云ふけれども、兎に角人間以外の動物では(動物學者は何と云ふか知らぬが)、普通に猿を最も伶俐なものとしてある。即ち猿は智を示すものである。次に犬の如きは、能く犬の様な奴だと惡口することもあるかなれど、犬程忠實な動物は、先づ家畜界に無い。夫で古墳を發いても、石器時代に、既に犬は人間の忠僕となつて居たことを見るのである。犬は家畜の嚙矢である。動物中、犬ほど愛情の深いものはない。犬は即ち仁を表はしたものである。雉に至つては昔の言葉にも(今日も地方に行くとき)、激しいことをカガジイと云ふ、カガジイと云ふのは、キギシと云ふことで、これが雉のことである。雉は激しい勇ましい鳥としてある。言語は兎に角、此の三動物は智仁勇の三徳を象つたもので、桃太郎は此の三鼎の徳を以つて、悪魔の王國襲撃の決斷を遂行したのである。是ぞ實に此社會を改良することを以て任ずる者

に取りての良き教訓である。宗教家、道德家又た教育家の如きは、此所に意を注いで少しく考へて貰ひたい。

要するに、倫理的の意味を一言て云はば、即ち智仁勇の三徳を備へたる一青年が、自家の理想を斷行して、社會の罪惡を滅ぼし、今迄罪惡の爲に用ゐられてあつた寶物——管に獨り物質的寶物のみならず、又た才能なり、學問なり、何なり——を善事に利用するのであつて、近い例を取れば、救世軍の働の如きをも意味して居る。我輩は救世軍の仲間に入つては居らぬけれども、其の事業を見ると、都市の魔窟とも稱すべき街區に這入り込んで往つて、其所に在る寶物、即ち金なり、人なりをば、善良なる目的に用ゐやうと勉むることは、大に尊敬して考ふべきことである。

第三、經濟の解釋に就ては、僕は特に述べたい事がある。全體日本人は永らく小さな島に住居を構へてゐる。其祖先も、中には大陸生れの者もあつたらうが、

概するに多數は、南洋の島から移つて來た馬來人種であらう。恐らく我々の身體に流れて居る血の多くは馬來人種の血であらう。

島國根性と普通に云へば、如何さま極小膽な意味に取らるゝが、島國人民必ずしも小膽では無いので、近き例を取つて英吉利を見れば分る。尤も或人は英吉利が大國となつたのは、島國根性が原因では無くして、彼の國へは大陸から種々の人種が來て、英國民を構成したもので、彼等は大陸國民の原素があるが爲めに大國民になつたと、一寸尤もらしい議論をする。されど歴史を見ると、英吉利が商業に或は航海術に長けて、四海に踏出したのは、大陸と稱すれば大陸であるけれども、實は半島國なる丁抹から移住したデーン族の賜である。予も惡口を言ふ時には、島國根性なる語を狭い意味に使ふが、實際は島に居る故、島國根性が起るのでなく、却て島に居れば四圍の海洋を相手にするが爲に、大陸に居つて、前は山で抑へられ、後は密林で支へられ、運動自由ならざる人民よりは、遙かに雄大

なる思想を起し得らるゝのである。馬來人種がスマトラの一小島に起りながら、南洋の怒濤を意とせず、恰も我が庭中の池に浮ぶが如くに、東西南北へ自由勝手放題に蔓つて、西は亞非利加沿岸にまで進み、東は亞米利加近くまで航海して、太平洋、印度洋等、馬來人種の至らざる隈なき状態になつたのは、實に同人種の運動の自由にして、思想の雄大なるを證するものである。

僕は桃太郎遠征の昔噺を以て、正しく日本國民が海外に意を注いで奮進する精神を表したものと信ずるのである。而して鬼ヶ島とは、南洋諸島の總稱である。日本が僅か八洲に止まつて居た時代は、八丈島が即ち鬼ヶ島で、爲朝時代の鬼ヶ島は即ち八丈島であつた。然るに一度日本人民が八丈島に落着いた曉には、最早鬼が絶えて鬼ヶ島の名稱は當らなくなつた。寧ろ其後は琉球を以て鬼ヶ島と稱へなければならなくなつた。されど又た琉球が一旦日本の領地となり、日本語も普及した以上は、モウ一層南方の島を鬼ヶ島と稱すべき事となつた。一步を南方に

進むれば、島猶ほ南に在り、鬼ヶ島の名稱は日本人の南進と共に愈よ南に移り行く。明治二十八年迄は、臺灣が即ち鬼ヶ島であつた。占領後十餘年の今日も尙ほ鬼ヶ島のやうな感を以て、内地人は臺灣を見て居る。言語風俗の異なる間は之れも止むを得ぬ、恐らくは今後五年乃至十年経つたならば、此の名は當らなくなつて、モウ一層南方の島を鬼ヶ島として、今日の桃太郎は遙かに遠き鬼ヶ島を指して遠征することになるであらう。又た鬼ヶ島の寶と云ふは、即ち熱帯の物産を指すのであつて、寶は『田から』なり。鬼ヶ島の寶は即ち熱帯地方の農産物を云つたことで、隠れ簀、隠れ笠、福槌等を桃太郎が分捕して來たといふとは、即ち種々の産物を本國に供給したことであらう。

教育の結果は遅いものである。吾人の進取的教育は、吾人の母の其又た母が、尙ほ其母の時代より受け來つたものであり、日本人は襁褓に在るの日よりして、桃太郎昔噺の爲に、大いに進取的精神を養成せられたのである。然るに只だ之を

なる思想を起し得らるゝのである。馬來人種がスマトラの一小島に起りながら、南洋の怒濤を意とせず、恰も我が庭中の池に浮ぶが如くに、東西南北へ自由勝手放題に蔓つて、西は亞非利加沿岸にまで進み、東は亞米利加近くまで航海して、太平洋、印度洋等、馬來人種の至らざる隈なき状態になつたのは、實に同人種の運動の自由にして、思想の雄大なるを證するものである。

僕は桃太郎遠征の昔噺を以て、正しく日本國民が海外に意を注いで奮進する精神を表したものと信ずるのである。而して鬼ヶ島とは、南洋諸島の總稱である。日本が僅か八洲に止まつて居た時代は、八丈島が即ち鬼ヶ島で、爲朝時代の鬼ヶ島は即ち八丈島であつた。然るに一度日本人民が八丈島に落着いた曉には、最早鬼が絶えて鬼ヶ島の名稱は當らなくなつた。寧ろ其後は琉球を以て鬼ヶ島と稱へなければならなくなつた。されど又た琉球が一旦日本の領地となり、日本語も普及した以上は、モウ一層南方の島を鬼ヶ島と稱すべき事となつた。一步を南方に

進むれば、島猶ほ南に在り、鬼ヶ島の名稱は日本人の南進と共に愈よ南に移り行く。明治二十八年迄は、臺灣が即ち鬼ヶ島であつた。占領後十餘年の今日も尙ほ鬼ヶ島のやうな感を以て、内地人は臺灣を見て居る。言語風俗の異なる間は之れも止むを得ぬ、恐らくは今後五年乃至十年経つたならば、此の名は當らなくなつて、モウ一層南方の島を鬼ヶ島として、今日の桃太郎は遙かに遠き鬼ヶ島を指して遠征することになるであらう。又た鬼ヶ島の實と云ふは、即ち熱帯の物産を指すのであつて、實は『田から』なり。鬼ヶ島の實は即ち熱帯地方の農産物を云つたことで、隠れ簞、隠れ笠、福槌等を桃太郎が分捕して來たといふとは、即ち種々の産物を本國に供給したことであらう。

教育の結果は遅いものである。吾人の進取的教育は、吾人の母の其又た母が、尙ほ其母の時代より受け來つたものであり、日本人は襁褓に在るの日よりして、桃太郎昔噺の爲に、大いに進取的精神を養成せられたのである。然るに只だ之を

聞流しにして、其深意の存する所を悟ることが出来ぬ爲に、折角の教訓も其効用を一層著大ならしむることが出来ぬ。或る獨逸人が僕に告げて、若し日本人が六十年前既に今日の如く開國主義を取つてゐたならば、米國が未だ其西岸に手を伸ばすことを得ざりし以前に、日本人が彼地に移住し、ロッキー山の西側は、悉く日本の領地になつたであらうと云ふ話をした。これは一場の笑話に過ぎぬやうであるけれども、僕は此話を聞いて實に趣味のあるものだと思ふて居た。それは兎も角も日本民族が此の昔噺を只だ聞捨てにして居て、其教訓に基いて奮起進取しなかつたことは非常に残念である。

只箇一點無明燭

鍊出人間大丈夫

分福茶釜の解

愛らしく無邪氣な小兒の御慰たるお伽噺には、飛く深き意味を含ませてある。僕は別にお伽噺を學術的に研究するわけでもないが、聴いたり見たりしたところに依れば、日本の御伽噺はインツプ物語と其性質が似て居て、多くは直接に勸善懲惡の意を現はして居る。此點に就いては歐羅巴に行はれて居るグリムや、アンダーセンの物語とは、趣向が異つて居る様である。かのカチ／＼山、花咲爺、舌切雀の如き噺は、或は懲を懲らし、或は人を親切にせねばならぬとか、愛とか云ふ事を教へてあつて、其噺を聴けば、直に其意味が了解せらるゝのである。又た無邪氣な幼兒でも其噺を聴いて、直に教訓の意を悟ることが出来るのである。普通世上に行はるゝ御伽噺は、かく一般に教訓の意を含んで居るが、中には教訓の

判然せぬものもある。例へば桃太郎の噺の如きは、勸善懲惡の點から見れば、一目瞭然とは云へぬ。或は玉の井の噺も、僕の考ふる處に依れば、歴史の話であつて、倫理的の性質を帯びたる部分が少い。而して殊に勸善懲惡の教の判然せぬ昔噺は『分福茶釜』である。

分福茶釜は、他の御伽噺に較ぶれば、少しく性質を異にする點がある。それは第一、場處が判然と記されてあつて、上州邑樂郡館林の茂林寺は（茂林寺、御朱印二十三石四斗、草創應永廿二年）と云ふこと、第二、道徳的の教訓が少しも籠つてゐないことである。従つて此噺は日本全國に弘がら無かつた様である。僕が想像するのには、恐らく此噺は、館林近傍より起つて關東に弘まり、一方は奥州に、一方は中國に傳播されたものであらう。中國でも此噺の傳はつて居ない所がある。九州には殆んど傳はつて居らぬと云ふも不可無してである。併し斯くは云ふものゝ、實際此噺は我國の大部分に傳播せられたに相違ない。何故かといふと、

他にも一地方の噺として、此の分福茶釜に匹敵すべき面白い噺が多くあるにも拘らず、分福茶釜ほどに傳はつて居らぬ。文藝俱樂部などでも種々なる地方の奇談を掲げたが、其等の多くは湮滅して、知らぬ人が多いものだ。然るに此の分福茶釜には生命がある。凡そ人間の思想も、宗教も、理學も、總て活きたものでなければ、永く傳はるもので無い。耶蘇教の如きは、彼此と批難があり、種々の迫害や攻撃を受けても、世界に擴つて居るのは、耶蘇教には生命とエネルギーとがあるからである。佛教、マホメット教の如きも、單に方便位のものであるならば、決して多くの信者を有するわけのもてない。宗教は方便に過ぎずと云ふ説の如きは、齊東野人の言である。精神、生命の無きものゝ、永く存続するを得ざる事は、争ふ可からざる眞理である。かの分福茶釜の噺には、たとへ表面には隠れて居ても、必ずや其中に深き意味が籠つて居るので無ければ、ドウして今日迄廣く傳播しやうか。然るに惜いかな、此生命ある噺の隠れたる意味は、遂に了解せら

れずにある。唯だ一つの不思議なる奇妙な昔噺として、小兒の好奇心を喜ばせるに過ぎないものとなつて居る。

世間に有り觸れて居る分福茶釜の噺を印行した本には、此の分福の分の字が、文の字になつて居る。思ふに文の字になつて居る爲に、一層意味が解からなくなつたのか。或はワザ／＼其意味を隠す爲に、文の字に代へたのかも知れぬが、分と云ふ字に改めねば意味が通じ無い。僕は此事に就いて、五年前或集會にて、文福茶釜の文は、分である、文では無いと云つたが、其事が一談柄となつて、それは新渡戸の當推量である、なにか立派な考證でもあるのかと、友人から大に揶揄はれた。然るに其後其朋友の一人が、上州館林の方に旅行した時に、夫の有名な茂林寺へ往つて、其寺の寶物になつて居る茶釜をば、住職に頼むて見せて貰つたさうな。すると其釜を入れてある箱の蓋には分福茶釜と書いてあつた。それで友人は其事を僕に知らせてよこした。僕は其時自分の推量が偶然適中してゐたので、愉快に堪へなかつたのである。其後又た僕が不圖手に入れた、百年以前の出版に係る分福茶釜の本には、まさしく分福としてあるので、いよく僕の判断の過ら無かつたことを知つた。校訂眞書太閤記十一編十二卷に、麻橋城寄せ手難戦の條に、分福茶釜の話が出てゐる。其話によると、印度より支那を経て、秦の徐福と同船して來朝した古狸が、茂林寺の納所となり、十世の住職に使はれた。而して「天正七年、此寺に江湖あり、諸國より集る處の僧千人に及ぶ。十世和尚曰く、江湖の結衆多くして、茶の間の釜小さし、大なるを買ふべしといふ。守齋(納所の名)答ふ、この茶釜小さけれども、江湖の衆へ茶を與ふるに差支なしといひて買ひもとめず。和尚心には服せざれども、老僧のいふ事なり、そのまゝになし置きけるが、果して千餘人の僧の唇をうるほして、すこしも乏しさを覺えず。守齋いはく、この茶釜、その人多ければ多きに供ふべし、その人少なければ少きに供ふ。其分にしたがつて其福あり、よつて分福の茶釜といふと云つて大に笑ふ。

で、愉快に堪へなかつたのである。其後又た僕が不圖手に入れた、百年以前の出版に係る分福茶釜の本には、まさしく分福としてあるので、いよく僕の判断の過ら無かつたことを知つた。校訂眞書太閤記十一編十二卷に、麻橋城寄せ手難戦の條に、分福茶釜の話が出てゐる。其話によると、印度より支那を経て、秦の徐福と同船して來朝した古狸が、茂林寺の納所となり、十世の住職に使はれた。而して「天正七年、此寺に江湖あり、諸國より集る處の僧千人に及ぶ。十世和尚曰く、江湖の結衆多くして、茶の間の釜小さし、大なるを買ふべしといふ。守齋(納所の名)答ふ、この茶釜小さけれども、江湖の衆へ茶を與ふるに差支なしといひて買ひもとめず。和尚心には服せざれども、老僧のいふ事なり、そのまゝになし置きけるが、果して千餘人の僧の唇をうるほして、すこしも乏しさを覺えず。守齋いはく、この茶釜、その人多ければ多きに供ふべし、その人少なければ少きに供ふ。其分にしたがつて其福あり、よつて分福の茶釜といふと云つて大に笑ふ。

これよりこの茶釜を分福茶釜といふ』と書いてある。

そこで此の分福茶釜の癖の要點を云ふと、何れも幼少の時に一度はお馴染のある通り、茂林寺と云ふ寺に、一個の茶釜があつて、住職は之を秘藏して居つた。然るに不思議や其釜に足が生えた、釜がノコノコ動き出したのである。此寺に入の古道具屋が此事を聞いて、これは良い儲仕事だと、早速住職から其足の生えた茶釜を借り出して、見世物を興行した。ところが珍しいものだから、非常に見物人があつて、此道具屋はシコタマ錢儲けをした。それで茶釜に禮金を添へて住職に返した。之が普通傳はつて居る分福茶釜の癖の筋である。此外に種々作り變へたのがある。僕の藏して居る分福茶釜の癖本の内で、一番古いのが寛政十一年頃の出版にて、かの有名なる十遍舎一九の作に成つたもので、これには奇々怪々なる事ばかり書いてある。いづれにしても此の分福茶釜の全體を通じて、道德的の教訓無きことを認め得らるゝのである。

成程道德上の教訓は含んでゐないが、此癖には他に大なる教訓が含まれてゐることを觀る。それは即ち、近頃經濟學者が頻りに論究する、彼の富の分配の眞狀を教へたもので、傍ら富の利用の方法をも示したる一大教訓である。夫れ寺院は俗界から離れた幽寂の境に在るものである。最も寺と云つても、耶蘇教の寺と、佛教の寺とは、各其趣きを異にしてゐる。歐米を旅行して見ると、寺や教會堂は最も人の群集する所に在つて、殊に羅馬教會堂の如きは美裝の令嬢より、縋縷を纏へる乞食に至る迄、何日何時にても禮拜の出來る様に、寺院の門戸が晝夜明放しになつて居る。然るに佛教の寺は、多くは俗界とは遠ざかつて、森林の中や、山の上に超然として、塵外に建てられて居る。之れは畢竟宗教思想上、耶蘇教とは修養法が違つて居るからであると思ふ。尤も西洋に於いても、中古には、耶蘇教の僧侶が、兎角世俗を遠ざかつて、砂漠や山林の中に隠れた例も少くはない。故に今日も、日本は勿論西洋でも、世俗と寺院とは相隔絶したるもの、如く思つ

てゐる。従つて宗教上の造營物——財産も、世俗の用に立つことは至つて稀である。既に西洋の法律でも、寺院の財産は、寄附者の遺言にあらざれば、處分することの出来ぬやうになつてゐる。これをば死手(英語 Mortmain. 獨逸語 Todte Hand)と云ふので、寺院の財産は死せる亡者の意志が、遺言に依つて生存して居る故に、此財産を動かし得るものは、死んだ人の手にあるのだ。故に此習慣は、たとへ世が幾變遷を繰返して、經濟的狀態が進むて來ても變化せず、寺院の財産は矢張り死手の支配に歸して居て、此活きたる社會に活潑に働くことの出来ぬものである。茂林寺で秘藏の茶釜も、所謂此の死手の類であつて、偶ま和尚さんが之を使用する位に過ぎなかつたのである。

然し財産と云ふものは、人間が利用すればこそ貴いのであつて、利用せられなければ瓦石にも均しい。御寺の和尚さんが賽銭箱に入れて置く金は、更に流通させぬ。成程社會の不穩な時、又は事業の末だ起らざる時代に於ては、左程不自由

を感じねが、世間が活動して、活潑なる現象を呈するに至つては、本來流通すべき金錢が、世の中に顔を出さねば、著しく不自由を感じる。近頃の事だが、印度の總督が、土人の富豪連を集めて演説したことに、『諸君が各自財産を秘藏して、土中に埋藏して置くやうでは、事業が擧らぬ。さうあつては社會が一向に進歩せぬから、ドウか其庫中に在る金を世間へ出して貰ひたい』と云つた。庫中、地中にある金は、死手に屬する財産と同一のものである。金錢は動かなくては用を爲さぬ、も足が無くては歩行かれぬ。日本で金錢のことをも足と云ふが、金錢は歩き廻るのが本職である。流通する故に泉と云ふ、泉は即ち錢だ。ソコで此茶釜に足が生えて動き出したと云ふのは、コゝの意味を顯はしたものである。茶釜にいくら足が生えても、之れを利用するものが現はれて來ねば役に立ぬ。ところが俗界の大俗物たる古道具屋が、和尚さんに頼んで、此足の生えた茶釜を借り受けて、最も俗的なる見世物を興行し、大勢の老若男女を集めて、世間の人々と面白

き樂を分つた。即ち此死手を活用したものと云はねばならぬ。之がため道具屋は莫大の利益を得たから、利息を添へて、此茶釜を和尚さんに返へした。之は即ち利息は當然貸借の報酬として、取つて宜いものなることを教へたのである。

何處の國でも、經濟状態の進まぬ時代には、金を貸しても利息は取らぬ。現に法律で利息の制限をした位である。宗教家は殊に之れを厭つたものであつて、いかにも經濟的状态の進まざる時代には、金を用ゐるの目的が、生産事業の爲めには無くて、所謂不生産的に消費するのが多いのである。故に金を貸しても、利子を取ることは稀である。利子を取るのは、ナニか不正の所爲であるかの如く考へて居た。まして生活状態が極めて簡易であり、各自の生命を支へるに足るだけの物を作つて、餘分に作る事をせぬ場合には交換もない、随つて金錢の必要も亦た少い。だから金錢を要するのは、よく／＼困難な時に限る。人の苦しき境遇を見て、金を貸すことは人道に協つて、仁の行爲であるが、利息を取るのは甚だ無情

だと、宗教家から教へられたものである。茂林寺の和尚さんが、古道具屋に茶釜を貸して禮金を貰つたのは、利息のつもりであつたかドウか分らぬが、ソレは孰れにしても、和尚が、實は秘藏すべきものでない、世間に流通すべきものであると悟つて、道具屋に貸し、後て利息を取つたと云ふ事柄から、此和尚さんを評すれば、宗教家とし、道德家としては、いざ知らず、經濟家としては、寔に驚くべき見識ある人物と云はねばならぬ。此のやうな和尚さんが、今も有ることなら、諸々の寺院の經濟は今日の如くに苦しくあるまいと思ふ。

斯の如く分福茶釜は、大なる寓意を以て、經濟的教訓を與へたものである。而して尙ほ他に此漸に就いて學ぶべきことがある。此茶釜を借りて錢儲をした道具屋は、近世の言葉で云へば企業家である。二十年前まで、經濟家は此企業家なるものを度外視して居つた。獨逸では、此種の企業家をウンテナルネーメル (Unternehmer) と云ひ、佛蘭西では、アントレプレヌル (Entrepreneur) と云ひ、而して

英吉利にはまだ適當の語が無いが、近頃はアンダーテーカー(Undertaker)と云ふ字を用ゐる。即ち此の企業家は、自分に資本が無くとも、社會の事情に精通し、資本家と生産家との中間に立つところの一種の技倆を有して居る。近時經濟組織の複雑となるに伴つて、企業家なる者が産み出されたのである。大製造場、大會社にて、一番氣樂で、一番高い月給を取つて居る者は、此の企業家である。朝遅く事務所に出勤して、新聞に目を通して、煙草をスバク／＼燻らしてゐて、さうして何處かの國に早軀があるとか、戦争が始まつたとか、其他經濟上に影響する事が起つたことなら、此先生の舞臺となる、彼は大立役者となる。ソコで此の古道具屋であるが、彼は社會の事情に通じた人、乃ち俗界のエラ物であつて、足の生えた奇妙不思議の茶釜を、見世物として世人の喝采を博してやらうと企てたのである。此道具屋先生は機智に長けて實に侮るべからざる者と云はねばならぬ。

此茶釜の噺は、百年二百年前の作とは思はれぬ程、専ら實業を重んじ、經濟事

情の發達せる二十世紀の社會を描き出してある。此噺は誰人の作に成つたかは、未だ考證が足ら無いが、恐らく當時先見の明ある人物が、社會の進歩を豫想して作つたものだと考へられる。而して我等は此の大いなる教訓に依りて鑑みなければならぬと思ふことは、分福とは福を分つ事であつて、而して其の福とは何ぞ。福といふ字は、示なる崇拜と、畱といふ満つる、此の二字より成るものださうな畱の字は今用ゐぬ字なる由だが、其元は高と厚との二字を略して、一所にしたものだと云ふ。福とは即ち幸、善、恵とか云ふ意である。五福と云ふは長命、財富、壯健、徳心、靜心、靜終である。而して漢字にも散福と云ふ熟語がある。即ち分福の意にして、神前にさげたる物をば、友人間に散分する意である。分福茶釜が與へたる教訓に就いて、我々の大に鑑むべきことは、乃ち福を分つの感念を強めねばならぬと云ふ一條である。年越しに厄拂と稱して、『鬼は外、福は内』と呼ぶ。福の内に入るを望むは、獨り日本ばかりで無い、恐らく何處の國でも同様

て、此慾は教へられなくとも、自然に發達する。是に反して教訓を要するのは、福を分つことである。福即ち生産に就いては、今日は器械の發明、運搬の便利は云ふに及ばず、社會百般の設備が整つて、百年以來の進歩は只だ驚くの外無い。甚だしきは過度の生産を爲す様に至つたのである。されば生産の事は、經濟學者も最早割合に心配せぬが、富の分配に付いては、彼等今日大に頭を痛めて焦心して居る。富の分配が適當で無い爲に、社會黨が起り、貧民が殖えたりするので、今日世界の大問題は究極する處、此の富の分配如何にありと云ふも不可無してある。尤も福を物質的にのみ考へれば、此福を分つにも、自から制限があり、少しも制限無しに分つときは、却て福の効用を爲さぬ結果を生ずるのである。貧乏の貧の字は、貝の上に、分の字である。貝は寶なり、貝を分てば貧となる。昔は貝殻を（今でも生蕃人は、貝を寶として珍重して居るが）貨幣として流通したものであつて、此貝を段々多勞の人に分配すれば、分配する各人の所有が減じて來

る。ソコで貧と云ふ字が出来たのである。分配も適度にせぬと宜しく無い。然るに物によつては、イクラ分けても少しも減らぬものがある。ソレは恰も光の如く、蠟燭の火の下で、一人が書物を讀むも、二人が讀むも、光線の強度は減じ無い。更に精神上から觀察すれば、自分の得た智識を人に分けても少しも減じない。

然るに茲に最も慨嘆に堪へざることは、日本人は長い間、此の分福茶釜の嘶を聞いて居ながらに、分福茶釜主義を實行せぬことである。チョット例を云へば、庭園を作るにも、高い塀を築いて、他から眺めることの出来ない様にする。奇麗に咲いて居る庭園の花は、自分が獨り眺めて喜んで居る、やつと見越の松くらゐが路傍から見られるに過ぎぬ。築山とか、泉水とか、花木の植込とかに、莫大の金を費すのは、自分だけの樂を満足せしむる爲である。尤も之は外にも理山はあらうが、要するに自樂主義である。又た高價なる骨董品や、寶物の如きも、床の間には飾るが、博物館には貸さぬ。公の場所に於て、公衆の目に觸るゝ様にする

考は毫も無い。唯だ自分獨りて樂しむのを、眞の樂だとして居る。或人の歌に、

月見ても更に嬉しく無かりけり、

世間の人も見ると思へば。

とあつて、ナント極端なる自我主義を歌つたものでは無いか。月は俚謠に『賤が伏屋に月がさす』とあるが如く、下界に平等の光を浴びせて居る。然るに月すら獨りて樂まねば、樂みとは思はぬ様では、たとへ孟子が如何程口から沫を飛ばして、衆と與に樂しむの説法をしても、馬耳東風ではあるまいか。或老人の歐米人と日本人とを比較して云つた言葉が甚だ面白い。其説に日本人と歐米人とは、一寸道路を歩いてても、其性質の異つた點が見える。歐米人は道に木が仆れて居るなら、其木を道の外に運んで、他人の邪魔にならぬ様にする。然るに日本人はさうで無い、假令木が倒れてゐても、其木を跨いて通るか、或は態々迂回して歩く。後から來る人の迷惑杯は思ひ遣らぬ、所謂公德に無頓着である。而も亦た日本人

は思想の交換と云ふ點にも、分福主義を行つて居らぬ。或る人の云ふには、日本人程話しにくい者は無い、日本人に會つて話をする時は、恰も劍術を使ふ時の身構をして、自分に間隙の無いやうにし、對手の間隙を狙つて、丁度敵地にある如き風である。それがため兩者の間には、自然と障壁が築かれて、自由に思想の交換が出来ないと。いかにも之れは適切なる比喩である。實際高官の人とか、知名の人などに會ふ時に、此の如き例は度々ある。官吏の如きは、役所での事務上の事は秘密にもせねばなるまいが、個人としてもイヤに勿體振つて居るものが往々ある。これは威嚴を損じてはいならずと云ふ積りでもあらうが、抑も思想を通ずべき言語が不充分であるためか、言語が充分であつても、思想を分つ希望が無いのか、又た希望はあつても、才能が無いのか、兎に角思想の點に就いても、己れ一人を高しとして、思想の流通を計らぬ。或老政治家の話したことがある。我邦の政治家は待合的の四壘半の政治家である。待合の會合では、いかにもエラさうに見

える。併し二十疊敷の廣間に出して喋らすと、四疊半と較べて見劣り、聞き劣りがする、ヒキタテが少い。まして彼等の議會に在るに於ては、殆んど自立たぬ程である。僕の實驗に於いても、残念ながら此老政治家の剴切なる痛罵を否定することが出来ぬ。各自が暗夜に足元を照らす爲に、提灯を點けるはいゝが、たゞ自分の足元ばかりを照らして、他人の足元までは照らさぬ。此の提灯的文明を捨て、燦然たる電燈の光を探りて、お互の足元が明るくなる如くに、他と共に福を分かち、樂しき事には互に樂を分かち、孰れも皆其恩恵を均一に受くと云ふ公共的觀念を涵養したいものである。即ち數百年前、分福茶釜のお伽噺が授けたる教訓をば能く守つて、此噺の作者の精神を大いに實際に施したいものである。

拈起一莖草 作丈六金身

教育の目的

今日世界各国の人の學問の目的とする所には種々あるが、普通一般最も廣く世界に行はれて居る目的は、各自の職業に能く上達するにある。マア職業教育とても言はうか。或はモウ一層狭く云ふと、實業教育と云ふのが、能く其の趣意を貫いて居るやうである。子弟を教育する其の目的は、先づ十中の七八迄職業を求むるに在る。殊に日本に於いては職業を得る爲に教育を受くる者が多い、百中の九十九まではさうかと思はれる。昔はどうであつたか知らねが、近頃は各國共に此の目的を以て、教育の大目的として居るやうである、殊に獨逸などでは、最もさう云ふ風である。

近來亞米利加の教育法はどうであるか。亞米利加は何の爲に大いに普通教育を

盛んにして居るか云ふと、即ち良國民を拵へることが其目的である、能く國法を遵奉する國民を造るのである。大工左官をさせたならば獨逸人に負けるかも知れぬ。大根を作り、薯を作らしたならば、愛蘭の百姓に及ばぬかも知れぬが、先づ國家の組織或は公益と云ふことを知り、大統領を選ぶ時にも、村長を選ぶ時にも、必ず不正不潔な行爲をしてはならぬ、國家の爲、一地方の爲だと云ふ大きな考を以て、投票する様な國民を養成したいと云ふのである。彼の料理屋で御馳走になつた御禮に投票するのは、少し違ふやうだ。佛蘭西人は少しく米國人と異つてゐる。同じ共和國ではあるかなれども、國民が投票する時に、亞米利加ほど合理的にすることは餘り聞かない。佛蘭西人は何の爲に子弟に教育を施すかと云ふと、先づお役人になりたい、月給取にしたいと云ふのである。十歳から二十歳まで教育すると、毎月幾許の金を要する。合計十ヶ年間に幾千法の金がある。之れだけの金を銀行に預けて置けば、年五朱として何程の利殖になる。けれども都

合好く卒業をして、文官試験にでも及第すれば、何程の俸給が取れる。或は何々教師の免状を取れば、此くらゐの月給に有り付くと云ふので、先づ算盤をせよくつて、計算した上で教育する。之は職業を求むる爲なのである。否職業を求むると云ふよりも、位地を求むる爲なのである。

之に類して獨逸の教育法も、職業教育とか實業教育とかを主とするのである。

獨逸語のヴァルトツヤフトリツヘ、アインハイト (Wirtschaftliche Einheit)、英語のエコノミック、ユニット (Economic Unit)、即ち『經濟上の單位』を能く有効にしやうと云ふのが目的である。即ち一國一市をして、成るだけ生産的に發達せしむるには、どうしたら宜いか、如何にせば最も國家經濟の爲めになるかと、經濟から割出した議論を立て、來ると、所謂社會經濟とか國家經濟とか云つて、國の生産を興さねばならぬと云ふことになる。殖産を盛んにしたならば、即ち其國其市の發達が一番に能く出来る、それが爲には、先づ經濟的の單位として子弟の教

育をするに歸着する。一寸佛蘭西に似て居るやうではあるけれども、獨逸のは子弟を職業に進めるのであり、佛蘭西のは其實位地を求めさす爲である。教師になりたい、役人に成りたいと、位地をチャンと狙つてやつて居る。斯様々の位地を得たい、それには是れだけの學問が要る。即ち是れだけの準備をする爲に何程の金を要すると云つて、チャンと算盤を弾いてやるから、之は仕事を求むるのては無い、位地を求むるのである。能く考へて見ると、之は獨り佛蘭西ばかりで無い、世界各國とも、皆さう云ふ傾向になつて居るであらうが、就中佛蘭西が最も著しいのである。

之を日本の例に取ると、少しく政治論のやうだが、例へば農學をやる、何故農學をやるかと云ふと、おれは日本の農業を改良したいからだと言ふであらう。されど日本の農業を改良するに就いては、種々の方法があるので、悉く自分一人でやらなくても宜い、それは到底出来ることでない。各個分業で農業の方法を漸次

改良すれば宜いのである。けれども一つ間違ふと日本の農業を改良するには、どうしても農商務大臣にても成らねばならぬ、さう云ふ地位に達し無ければ仕事が出来ないやうに思ふ人もある。然るに明治十四年に農商務省が出来てより今日に至る迄、農商務大臣が幾人變つて居るか知れぬ。其の方々が日本の農業改良の爲に、どれだけの事を盡されたかと云ふと、何だか知らぬが、僕の眼には餘り大きく見えない。山高さが故に貴からず、木あるを以て貴とし、位あるが爲に貴からず、人格あるが故に貴しとす。位地と人格との差は大なるものである。日本の教育に於いては普通佛蘭西風に、皆おれは何う云ふ地位を得たい、銀行の頭取に成りたい、會社の重役に成りたい、或は役人に成りたい、而も高等文官に成りたいと云つて、初から其の位地を狙つて居る。さうしてそれが爲に五年なり十年なり奔走して居る間に官制改革……ヒョイと顛り覆つてしまふ。職業教育を狭くやると、さう云ふ弊に陥つて来る。それならと云つて、僕は決して職業教育をするな

と云ふのではない、職業を求むる爲に教育をすれば又た宜いこともある。それは獨逸の例を見れば分る。彼の鈍い獨逸人、あれほど國民として鈍い者はあるまいと思はれ、皆が豚を喰ひ、ビールを飲んで、たゞゴロ／＼として居るので、國民としては甚だ智慧の鈍い者である。さうして愛國心なども有るのか無いのか、漸う／＼三十余年前に佛蘭西と戦争をして勝つたから、アゝおれの國も矢ッ張り人並の國だわいと思つて、初めて一個の邦國たる自覺が起つた。斯く未だ目が覺めてから四十年にもならない、それまでは熟睡して居つた國である。其の國民にして今日の如き進歩をなしたのは、主として此の職業教育が盛んになつた結果であることは僕が斷言して憚らぬ。故に國を強くし、殊に殖産を盛んにする國是の定まつた以上は、職業の爲に——位地の爲とは言はない——教育することは誰しも大いに賛成する所である。

職業教育に就いては、茲に又た最も著しき一例がある。英國の富豪モーズレー

は、世界の趨勢を鑑るに、獨逸と亞米利加とは國運勃興の徵候が見えてゐる。然るに獨逸は國土に限りがあるが、亞米利加はトント限りがない。故に後來英吉利の最も恐るべき敵は亞米利加である。だから一つ亞米利加の經濟状態を探究して見やうと云ふので、自腹を切つて數萬の金を出し、是れは政府より依頼されたのでは無い、モーズレー自身が金を出し、英吉利の有名なる數多の人々を委員に頼み、商業、工業、農業或は教育と、それ／＼各自の取調事項の分擔を定めて、彼等を亞米利加へ派遣して取調べさせた中に教育に關した調査がある。それによつて見ると、亞米利加では小學校を卒業した者、即ち十歳くらゐの子供が何か詰らない仕事をして、一日に十仙か八仙くらゐの賃錢を貰ふ。其の給金が段々と年を重ねるに従つて増して行く。十五歳になれば五十仙取れる、二十歳になるとズツト進んで一弗も取れるやうになる。それから尙ほ段々と長ずるに従つて進むかと云ふと、先づ概してそれより以上は進まない。二十五歳でも一弗、三十歳でも

一弗、五十歳にもなれば八十仙と云ふやうな工合に下つて来る。是れは所謂小學校だけの教育を施したものであつて、職業的の教育を授けたもので無いからである。ところが茲に稍高等な教育を受ける者がありとすれば、其の子供が十歳の時分には十錢も取れ無い。小學校を卒業すれば引續いて中學校へ這入るのだから、寧ろ十錢どころでは無い、尙ほ學費を要する。マイナスくらゐなものである。さうして二十歳くらゐになつて稍高等の學校を卒業すると、圖を引くとか、機械を動かすやうになる。さうすると直ぐに幾ら取れるかと云へば、一弗は取れ無い、先づ五十仙とか八十仙くらゐなものである。前に云つた小學校を出て、直に十仙の金を取る者を甲と云ひ、後者を乙とすれば、僅か小學校を卒業した者でさへ、二十歳になつて一弗の収入を得て居るのに、稍高等の學校を卒業した者が、二十歳になつて六十仙か八十仙しか取らない。而もそれまでは一文の金を儲けるところではない、常に親の脛を齧つて居り、さうして學校を出てからの儲け高が少い

から、双方の親が寄合つて何と云ふであらうか。甲者の親が乙者の親に向つて、『お前の子供は何だ、高等の學校へ入れて金ばかりを使ひ、何だか小理窟のやうなことばかりを云つて、漸う／＼學校を卒業したと思つたら、僅かに五十仙か八十仙しか取ら無いぢやないか。して見るとおれの所の子供はエライものだ。小學校を卒業した十歳の時から金を儲け、今では一日に一弗も取つて居る、學問も何も要らない、お前は飛んだことをしたものだ』と言ふのである。如斯きは我國に於いても往々聞くところの言葉である。然るに乙者が二十五歳に成ると中々前の一弗の儘で無い、一弗五十仙にもなる、三十歳になれば益す良くなつて來て二弗も三弗も取り、四十歳になると益す多くの収入を得ると云ふやうな傾向である。然るに今一層高等なる職業學校、或は大學のやうな所へ子弟を入れるならば、二十歳になつても未だ卒業しない、二十五歳か三十歳近くになると、何うやら斯うやら四角なシャツポを廢めて、當り前のシャツポを冠る。『お前の所の小僧は、

三十になるまでも親の脛を齧り、四角なシャツボを冠つて居る』と斯う謂はれる。その小僧が大學を卒業して、銀行へ出たり、文官試験に出たりして都合よく行けば、漸うく月給三十圓ぐらゐだ。餘程良くつて六十圓、日に二圓しか取れぬ。其代りに三十歳から四十歳になると、其の途中で放蕩をし無いで眞面目にやつて行けば、前にシツカリ學問をしたも蔭で、ドシ／＼と報酬額が増して來るのである。幾十圓、或は幾百圓と云ふやうに成るであらう。五十ぐらゐになれば國務大臣にでも成れる人物もある。初め十歳から金を取り始めた先生は、六十歳に成つても、逆も國務大臣の見込は無い。是れはモーゼレーの委員の調べて書いたもの大意である。實に此の給料増進率が巧みに出來て居る。

然るに職業の爲に教育をするに就いて、極めて困難なることは其程度である。一昧教育なるものは、各自が心に存する力を發達せしむるのが目的であるのに、夫れに程度を定めて、之れ以上發達せしむべからずと斷定したり、或は其の程度

で以つて押へるのは甚だ忍び無いことである。けれども職業の教育になると、之を定めねばならぬ。手近い話が大工が鉋などを使ふときにも、出來るだけウンと氣張つてやれと云はれて、ウーンと有りと有らゆる力を出してやつた時には、どんなことが出來るか。材木を損するばかりではなく、自分の手足を負傷するかも知れぬ。物事には程よい加減があるから、職業を見當にする教育の目的も、之を充分に何處までもズット伸ばすことは難かしいと思ふ。或漢學者から聽いたのに、**教育**の字は餘程面白い字だ、**育**の字を解剖して見ると上の**云**は**子**と**云**ふ字を逆にしたのださうで、下の**月**と**云**ふ字は**肉**と**云**ふ意味ださうである。之は小供が彼方向いて居るのを、美味しい物即ち肉を喰はせてやるから、此方へ向けと云つて引張込む意で、是れが所謂**育**の字の講釋ださうである。斯う云ふ意味に取るときには、職業教育も餘程注意しなければならぬ。何故かと云ふと職業を授けて行くに、其の職業の趣味を覺えさせねばならぬし、そして其職業以上の趣味を覺え

させぬ様にもせねばならぬ。

曾て實業學校長會議の席上にて愚説を述べたことがある。其説の要點は、今日我日本に於いて、専ら職業教育を唱へるけれども、之には注意しなければならぬことがある。近頃我國には鍛冶屋のやうな學校もあれば、大工のやうな學校もある。高尚な學校は大學であるが、兎に角随分高尚な所まで、大工や左官の學問も進んで來て居る。然るに實際今日職業の統計を取つたならば、必ずや日本國民の著しき多數は、車を挽くのを渡世として居る。日本國中の車夫の統計を擧げたならば、恐らくは全國の大工の數よりも、左官の數よりも餘計に在りはせぬかと思はれる。故に大工左官の爲に學校を建て、やる必要があるならば、其數の上からして、車夫の爲にも學校を建て、遣ることが一層必要であらうと云ふた。之は未だ僕が其筋に建議した譯では無いが、若し車夫學校を建てるとすると、それにはどんな學科が必要であらうかと思つて、色々考へたが、先づ第一に生理學が必要

と思つた。彼等に取つて欠くべからざるものは筋肉の勞働である。車を曳く姿勢にも様々あり、又た驅けるときにも、足を擧げて走る奴もあり、ヒョコ／＼と走る奴もある。之を兵式體操を教ふるが如く、其の筋肉を使ふ時分に『進めッ』と云つたら、斯う云ふ工合に梶棒を握り、足を擧げて驅けるのだと、一々教へてやつたらドウであらうか。全國幾萬と云ふ車夫が、最も經濟的に筋肉を使用することが出來て、勞力を多大に節約し得らるゝならう、之は大切な問題である。それに就いては一通り生理學を教へねばならぬ。生理學を教へて置くことは獨り車夫の爲ばかりで無い、其の車に乗る所のお客さんの爲にも大なる利益がある。一寸車夫が客の顔を見て、『ア、お客さん、あなたは腦充血でもありさうな方です』とか、或は一寸脈を取つて見て、此のお嬢さんは心臟病があるとか分る、それで挽き加減をするやうになる。又た生理學ばかりで無い、地質學も心得てゐたら宜からう。客が彼方へ廻れと云へば、すると、あそこの地質は何と云ふ地層で、雨の

降る時分には中々滑る岩層であるとか云ふことが分る。其他氣象學も教へて置けば、今は天氣が晴れて居るけれども、是れから車を挽いて三里も行けば、天氣が變つて來るからと、前以つてそれだけの賃錢を増して約束する。客の方でも車から降りるときに、彼是小言を云ふ必要が無いと云ふやうな種々な便利がある。如斯くに車夫學とても言はうか、之を特殊の専門學校で教へるやうにしたらどうであらう。されど一步進んで考へると、車夫が生理學を學び、一寸人の脈でも取るやうになれば、矢張り車を挽いて居るだらうか、恐らく挽いてはゐまい。脈が取れるやうになると、もうバツチと半纏とを廢めてしまひ、今度は自分が抱車に乗つて開業醫に成りはせぬか、それが心配である。して見ると車夫なら車夫と云ふ職業で、彼等を捨て置いて、車夫以上の智識を與へてはならぬ。夫れと同じ事で、商業だらうが、工業だらうが、或は教育學であらうが、其他何の學問であらうが、人を一の定まつた職業に安んじて置かうと思へば、其の職業以上の教育を

せぬやうに程度を定めねばならぬ。然るに之は甚だ壓制なやり方で、到底不可能ではあるまいか。維新以前は、左官の子供は左官、左官以外の事を習つてはならぬぞと押へ附けて居たかなれど、時々左官の子にして左官に満足しない奴も出て來た。或はも醫者さんから政治家が出たり、左官から慷慨悲憤の志士が出たりした。之は何かと云ふと、教育と云ふものは程度を定め、之れ以上進んではならぬと云つて、チャンと人の腦髓を押へ附けることの出來ないものであるからだ。

少年が大工にならうと思つて工業學校へ這入るとする。然るに彼等は工業學校を卒業した曉に大工を廢めてしまひ、海軍を志願する、かゝる生徒が續々出來るとする。すると縣知事さんが校長を呼んで、此の工業學校は、文部省から補助金を受けてゐるとか、或は縣會で可決して經費を出して居るのであるとか云ひ、其の學校の卒業生にして海軍志願者の多いのは誠に困ると、知事さんらしい小言を云ふ時には何うであるか。『お前は海軍の方へ這入り、海の上の大工に成らうと

云ふのでもソレはいかぬ。大工をやるは宜いが、海上へ行つてはいかぬ、陸上の大工に限る』とチャンと押へ附ける事が出来るか、それは決して出来ない。日露戦争に日本の海軍が大勝利を博し、東郷大將が大名譽を得られた。明治の歴史に是れほどエライ人は無いと云ふことをば、大工の子供も聞いて居る。それに倫理の講堂では、一旦緩急あらば、義勇公に奉じ云々と毎々聞いて居る。それで彼等に、之は陸上に居つたて詰らない。小屋だの料理屋だのを建て居るよりも、あれも一つ海軍に入つて、第二の東郷に成らうと云ふ野心の起ることがありとしても、それは無理がない。そこで育の字だ、此の上の方の子が美味の肉を喰はうと思ひ、此方へ向いて來るのも亦た當り前である。夫れをこちらへ向かせまいと思つたら、あちらの方にも一つ美味しい肉を附けて、大工は東郷さんよりもモウ一際エライぞと云ふことを示さねばならぬ。ところが大工が東郷大將よりもエライと云ふことは一寸議論が立ちにくい。ヨシ立つた所で子供の頭には中々這入らな

い。止むを得無い、社會の趨勢で、青年がドウしても海軍に行きたがるやうになつた時には、之を押へ附けることは出来ない。けれども其局に當る教育者が、成丈生徒を其職業の方に留めたいなら、其職業の愉快なること、利益あること、而も只だ個人の爲のみの利益でない、一縣下、一國の爲の利益だ、公に奉ずる道だと云ふことを能く教へねばならぬ。ナニ大工學だ、左官學だ、そんなものは詰らぬと云つて、馬鹿にするやうではいかぬ。けれども世人が軍人々と云つて居る間は、皆軍人に成りたいのは無理でないから、それで我々はお互ひに注意して、職業に優劣を附けないやうにせねばならぬ。

一體子供は賞められる方へ行きたい者である。小さい奴は錢勘定で動くものではない。日本人は賞められるのを最も重く思ふことは、日本古來の書物を讀んでも分る。日本人と西洋人との區別は其點に在るので、日本人は悪く云へばオダテの利く人間である、良く云へば非常に名譽心の強い人間である。譬へば日本の子供

に對しては、此コップを見せて、『お前が此のコップを弄んではならぬ、若し過つて壊したら、人に笑はれるぞ』と云ふのであるが、西洋の子供に對してはさうでない。七八歳或は十歳くらゐの子供に對して、『此コップは一個二十錢だ、若しもお前が此のコップを弄んで壊したら、二十錢を償はぬばならぬ、損だぞ』と云ふと、その子供はさうかなと思つて手を觸れない。日本の子供には損得の問題を云つても、中々頭に這入るもので無い。殊にお武士さんの血統を引いて居る人達はさうだ。『損だぞ。』『そんならやつてしまへ』と云つて、ポーンと毀してしまふ。

それで日本人の子供に向つて、『此コップは他人から委ねられた品物だ、一旦他人から保管を頼まれたコップを壊すと云ふのは、實に耻かしい次第だ、大切に置いて』と斯う云ふのも宜いが、それよりは『お前がそんな事をする、あのをおさんに笑はれるぞ』と云ふと直ぐに廢めてしまふ。人に笑はれるほど恐ろしいものは無いと云ふのが、今日の所では日本人の一つの天性だ。日本では名譽心――

榮譽心が一番に尊い。であるから今云ふ職業のことでも同じ道理である。大工や左官が卑しい者だと云つて居ると、誰もそれに成るのを嫌がる。軍人ばかりを褒めると、皆軍人になりたがる、所謂オダテが利くのである。それでどんなに必要な職業でもそちらに向かない。併し政府の云ふことなら大概な事は聽く。所謂法律を能く遵奉し、國家と云ふ字を頗る難有がる國民であるから、法律を以て職業の順序を定めるも宜からう。しかし縣令や告諭ぐらゐでは覺束ない。内閣會議にでも出し、それから貴衆兩議院で決めて、可成人の嫌ふやうな職業を重んずるやうにする法令でも發布したら、或は利目があるかも知れぬ。けれども日本人はオダテの利く人間だから、そんなことをするよりも、遊ばせとかさんの字をモット餘計に使ふやうにすれば、大分利目があらうかと思ふ。『車屋さん、どうぞ是れから新橋まで乗せて往つて戴きたいものです、お挽きあそばせ。』『車屋さん、是は甚だ輕少ですが差上げませう。』サア斯うなつて來ると車夫と云ふものはエライも

のだ、尊敬を受くるものだと成つて、車夫の位地もズツト高まるし、又た子供も悦んで車夫に成るであらう。皆それ／＼高尚な資格を備へた人が車夫になる。今日では竊盗でもあるとか、或は喧嘩でもしたと云ふと、其の犯人としては車夫仲間へ一番に目を付けると云ふ話だが、そんな事も無くなつてしまひ、一朝天下の大事でも起れば、新聞屋が車夫の所へ御高説を承はりたいと云つて往くやうにならう。マア世の中はそんなものである。要するに一方に於て職業を輕蔑する觀念が大いに除かれ無ければ、どれほど職業教育に力めた所で効能が薄からう。

以上教育を施す第一の目的が職業であることを述べて来たが、然るに第二は又たそれと反對の目的がある。それは即ち道樂である。道樂の爲に教育をする。道樂の爲に學問をすることがある。之は一寸聞くと耳觸りだ。けれども能く之を味つて見ると、又た頗る面白い、高尚な趣味があらうと思ふ。人が學問をするのも斯う行きたいものだ。來月は月給が昇るだらうと、職業的勘定づくめの學問を

すると、九で頭を押へられるやうなものだ。けれども道樂に學問をすると、さう云ふことが無い。譬へば育の字の上の子が、何だか芳しい香氣がするぞ、美味さうだ、一寸舐めて見やうと思つて、段々肉の方へ向つて來る、即ち樂みを望んでクルリと廻つて來るのであるから、是ほど結構なことではない。道樂の爲に學問することは、一方から考へると非常に高尚な事である。然るに日本人には道樂に學問すると云ふ餘裕が未だ無いと云つても宜し。

日本人は頭に餘裕が無い。西洋人には餘裕があることに就いて云へば、彼の英吉利の政治家を見るに、大概の政治家は何か著書を出すとか、或は種々の學術を研究して居る。今の首相も、先達の新聞に載せてある所を見ると、何とか云ふ高尚な書物を著はして居る。グラッドストーンの如きは、あれほど多端な生涯を送つたにも拘らず、常にホーマアの研究をして居た。故の首相ソールズベリー侯は自宅に化學實驗室を設けて置いて、役所から歸ると、暇さへあれば化學の研究を

して居た。前首相バルフォアの如きは二三種の哲學書を著して居る。然るに日本の國務大臣方にはどう云ふ御道樂があるか。學者の讀む眞面目な書物などをお著はしになつたことは一切無いと云て話である。それならどんな事をしてお出でになるか、能くは分らぬ。酒席で漢詩でも作らるゝが關の山であらう。して見ると道樂の爲に學問をすることは、日本では未だ中々高尚過ぎるのである。其一つの證據には、『女道樂』、『酒道樂』、『食道樂』と云ふやうな書物は出て居るけれど、『學問道樂』と云ふ本は未だ出てゐない。さう云ふものが出ねばいかぬ。村井さんも最う少し世の中が進んだならば、『學問道樂』と云ふものを書くだらう乎。私は村井さんの存命中に、さう云ふ日の來らんことを希望するのである。

學問の一つの目的として道樂を數へることも、決して差支へなからうと思ふ。一寸聞くと差支へるやうに思はれるけれども、意味の取りやうに由つては實際差支へが無い。或は道樂を目的として教育するのは、をかしいと云ふ人があるかも知れない。

しれぬが、併し華族さんの如きは別に職業を求むる必要がない。さう云ふ人は道樂に學問するのが大いに必要であらうと思ふ。否、華族さんで無くても、一般に道樂に學問をしたら宜い。即ち學問の研究を好むやうにならねばいかぬ。そのみならず、我々が家庭に在つて子弟を養育する際にも、學問道樂を奨励したい。然るに今日では、學問は中々樂みどころで無い、道樂どころではない、餘程うるさい、頗る苦しいものゝやうに思はれて居る。それと云ふのは、昔は雪の光で書物を読んだとか、螢を集めて手習をしたとか、所謂學問は螢雪の功を積まねばならぬ、餘程辛いものであると云ふ教になつてゐるからである。併し僕とても、學問は骨を折らずに出来るものだと云はない。たゞ面白半分によつたら、其内に飛び上つて行くものだと云はない。學問や研究は中々頭腦を費さねばならぬ、眠い時にも睡らずに勵まねばならぬ。けれどそれと同時に學問は面白い、道樂のやうなものであると云ふ觀念を一般の人に興へたい。家庭に於いても、アハ、

と笑ふ間に、子弟をして學問の趣味を覺らせることが必要である。

今日小學では何う云ふ風に教育して居るか云ふと、大體小學校の教授法が面白くない。子供は低い腰掛をズラリと並べ、其所に腰をかけて居る。先生は高い所に立つて居る。子供が腰掛の上に立つて、先生が下に坐つて居ても、また子供の方が低いのに、先生が高い所に立つのだから、先生ばかり高く見える。即ち學問は高臺より命令的に天降る、生徒は威壓されて學問を受ける。それもマア宜いが、さうしてたゞ窮屈に儀式的に教へて居るので、面白をかしく智識を興へることが無い。一體日本の子供ほど可哀相なものはあるまいかと思ふ。我國には憲法があつて、國民は自由である。或は種々の法律があつて、生命財産の安全を保つて居るけれど、教育の遣り方を見ると實に情無い。先づ子供が生れる、脊に負はれる、足を縛られる、血の循環が悪くなる、或は首が曲る。太陽の光線が直接に頭を射て腦充血が起る、又た其光線が眼の中に入つて眼を痛める。或は乳を無暗

に哺ませ過ぎて胃腸病を多くする。日本に眼病や胃腸病の多いのは幼兒の養育法を過つて居るからである。又た足を縛るから足の發育が出来ないで、皆短い足になつてしまふ。生れたときからさう云ふ養育法をやり、さうして小學校へ入學してからでも、何か面白いことを云つて笑ふ間に學問をさせるとか、或は筋肉を動かして、身體の發達を促がせば宜いが、さう云ふことはない。尤も近來は小學校の教授法も大分に改良が出来たけれど、兎に角子供の心中には、學問は苦しいものだ、辛いものだ云ふ觀念が注入されて居る。其筆法で大學まで來るが、其間子供が何か書くときでも、面白いと思つて書きはしない、いやだ／＼と思つて書いて居る。即ち智識を得るのは成程螢雪の功だと思ふやうになる筈だ。

若し學校に於ける教育法の改良が急に出来ぬならば、切めて子供が家庭に居る間でも、智識が面白く其頭腦に注入される様にした。父母が面白をかしく不知不識、子供に智識を興へるやうにしたい。僕は子供の時に頭髮を結うて貰つた、

八歳の頃迄は髪を結つたのであるが、時々他人から髪を梳いて貰ふと實に痛くて堪らない。其痛さ加減は今でも忘れられ無い。あれが今日の教授法である。けれどもお母さんが梳くと痛く無い、どんなに髪が纏れてゐても痛くも何とも無かつた。家庭の教育とは斯う云ふものでは無からうかと思ふ。同じ事でも母親は柔かくやるから痛くない、丸てお乳でも哺んで居る心地がした。ところが母親で無い人、即ち今日の先生がやると、無暗に酷くグウーツとやる。…さう云ふ譯で學問は辛いものだと言ふ觀念があるから、學校を卒業すればもう學問は御免だ、眞平御免を蒙りたいと言ふ者が起る。ましてや道樂の爲に學問をするなど、云ふ者は毛頭起る理由が無い。僕の望む事は家庭に於て、女子供に雜誌でも見せる折には、譬へば『ラヂエウム』と云ふものは、佛蘭西の斯う云ふ人が發明したもので、之は著しい放射性の元素であると云ふことでも書いてあつたなら、それを平易に説いて聞かせ、尙ほ挿畫でも有れば見せて皆で楽しむやうにしたい。其間に子供

は學問の趣味を味ふのであるが、今日の所ては其の教へ方を無理に難かしくして居る。即ち小學校などでは儀式的に教育するから、子供があちらを向いて居るのを、こちらへ向かせる眞の教育の趣旨に適ふまいと思ふ。前に云ふ通り育の字は肉の字の上に、子供の子が轉倒して居るのであるから、其の子供の向き方を變更させるのには大いに手加減がいる。其の手加減を過まれば教育の方が轉倒してしまふ。願くは教育は面白いものであると云ふ觀念を持たせ、道樂に學問をする人の増加するやうにありたいものだ。

第三の目的は、道樂と稍關聯して居る、稍類似して居ると思ふが、少し違ふので即ち裝飾の爲に學問をすること、之も則を越えない程度で、目的としたら宜いと思ふ。教育を飾りにする、これは一寸聞くと甚だをかしい。成程之は過ぎるといかぬ。總じて物は過ぎるといかぬのである、殊に飾りの如きはさうだ。婦人が髪でも飾るとか、或はお白粉を付けるとか、衣類を美麗にするとか、それにし

ても度を越えると堪らない。されど程好くやつて置くなら、益す其美色を發揮して、誠に見宜い者である。ナニ婦人に限つた事はない、男子でもさうだ、矢張り裝飾が必要である。男は何の爲に洋服の襟飾を掛けるか。矢張り幾らか裝飾を重んずる故だ。フロックコートの背に幾つもボタンが付いてゐるが、彼所へあんな物を付けたのはどう云ふ譯であらうか、前には臍があるから、平均を保つ爲後に付けたのか、或は乳として付けたのか。乳なら前の方へ付けさうなものだが、後の方に付けるのは何う云ふものであらうか、何しろこんなものは無用の長物だと思へる。けれども一は縫目を隠すため、一は裝飾の爲だと聞くと成程と合點が往く。尤も之れは、昔、劍を吊つた時分、帯を止める爲にボタンが必要であつたのが、今では飾と成つたのだ。凡そ天下の物に裝飾の交らぬはなからうと思ふ。して見れば矢張り教育なるものも、一種の飾としてやつても宜い。

學問が一の裝飾となると、例へば同じ議論をしても、一寸昔の歌を入れて見た

り、或は古人の言行を擧げて見たりすると、議論其者が別にどうなるものには無くとも、一寸裝飾が附いて、耳で聞き、目で見て甚だ面白くなるのである。其の裝飾が無くして、初から要點ばかり云つては心に入り様が悪い。世間の人が朝出會つて『お早う』と云ふのも、一種の飾のやうなものだ。朝早いときには早いのであるから、別に『お早う』と云ふ必要が無い、黙つて居れば宜からうに、さうではなう。『お早う』と云ふ一言で以つて双方の間がズツと和ぐ。今まで何だか變な面だと思つた人の顔が、『お早う』を言つてからは、急に何となく打解けて、莞爾かなやうに異つて來る、即ち其の人の顔に飾が附いたやうになる。さうするとお互ひの交際が誠に滑かに行くのである。

露國の聖彼得堡に一人の有名な學者がある。其人は波斯敎の經典『ゼンダ、アヴェスタ』に通じ、波斯古代の文學に精しく、而して年齢は八十ばかりになつて居るさうだ。此人が聖彼得堡の大學では一番に俸給が高い、ところが波斯の古代文

學の事だから研究希望者が無い。それで先生は教場に出て講義をするけれど、之を聴く學生が一人も無い爲に、近頃は大學に出ないで、自分の家にばかり居るさうだ。それなら月給は何うするかといふと、それは満遍なく取つて居るさうだ。愛媛縣知事安藤謙介君は露西亞學者で、あの人が露國の日本公使館に居た時分、露國の文部大臣であつたか、兎に角位地の高い役人に會つた時に、『彼の某はエライ學者だとか云ふけれども、其講義を聴く者が少しも無いさうだ。然るに其俸給は一番高い、幾千と云ふ年俸を取つて居るさうだが、随分無駄な話で、國の費えでは無いか』と言つた。さうすると其役人の曰く、『どうして、あれは安いものである。波斯の古代文學を研究して居る者は、歐羅巴に彼一人しか無い。ところで偶々十年に一度とか、五年に一度とか、波斯古代の文學に就いて取調べる事があり、研究を要したり、或は學者の間に議論でも起るとなると、其事に精通したものが他に無いから、直ぐに先生の判断で定まる。して見れば一ヶ年何千圓の年俸

を遣つて置いた所で安いものだ』と云つたさうであるが、その某と云ふ學者は唯だそれだけの御用だ。之は何の爲であるか、乃ち謂はゞ國家の飾りだ。『斯う云ふ學者はおれの國にしかない、他に何處にもあるまい』と世界に誇れる。即ち波斯の古代文學に就いて、此人が專賣特許を得て居るのである。さう云ふ飾りの人物だから、一ヶ年三萬圓くらゐの俸給を遣つても安いものだ。日本では利休の古茶碗を五千圓、六千圓と云ふやうな金を出して買求め、之を裝飾にして居るものがある。是れは國の風習だから仕方がないけれど、之れよりも學者を國家の裝飾として居る方が宜からうかと思ふ。學問と云ふものは國の飾とて言ふべきものである。又た個人より言へば、各自日常の談話に於ても、自然其所に裝飾が出來て萬事圓滑に行くのである。故に教育、或は學問の目的として此の裝飾を重んずることは、至當な事であらうと思ふ。

第四の目的は一見した所、道樂或は裝飾に稍似てゐるが、大分に其の主眼が違

ふのである。即ち第四の目的は真理の研究である。一寸難かしいやうであるが、別に説明の要も無い。無論先きに言つた職業とは違ふ。職業を目的とする者ならば、之は果して真理だか何だか、そんなことはどうでも構はぬ、金にさへなれば宜いのである。けれども學者と稱するものが學問をする時分に、之が果して真理であるか無いかと云ふことを研究するのは、是は高尚な……最も高尚とは言はれぬけれども、マア今まで述べた所のものよりは遙かに高尚であらうと思ふ。併し之も餘程餘裕がなければ出来ぬことである。日本で言はうならば、大學と云ふ所は、學理を攻究する最高の場所である。然るに實際は何うかと云ふと、それは随分學理の攻究も怠らないが、學理の攻究ばかりするには何分俸給が足ら無い。學問するには根氣が大切である、根氣を養ふには食物も美味なる物を食はねばならぬ、衣服も相當なるものを着ねばならぬ。冬は寒い目をしてはならぬ、夏は暑い目をしてはならぬ。成るだけ身體を壯健にして置かねば學問が出来るものではない。

無い、それには金が入る。然るに今日の有様では所謂學者の俸給は、漸く生命を繼ぐだけに過ぎぬ。かゝる譯であるから、學問の攻究、真理の研究などいふことは、學問の眞個の目的とでも云ふべきものであるけれども、實は餘り日本に行はれて居ない。ドゥか其の眞理の攻究の行はれるやうにしたいものだ。先に車夫を鄭重に待遇するやうになれば、世人は好んで車夫になるだらう、さすれば車夫に學問を授けても、車夫たるを厭ふものが決して無いやうになるだらうと言つたが、學者も亦た其通りで、兎に角學者を鄭重にすることをせねばならぬ。日本に於ては、或る事に就いては、幾らか學者を鄭重にする風があるけれども、概して鄭重にはしない。一寸鄭重にするのは何う云ふことかと云ふと、先づあの人は學者であると云へば、一寸何かの會へ行つても、上席に座らせるやうな形式的のことをする。けれども亦た一方に於ては、どんな學問をして居ても、學問にはそれ／＼専門のあるものだが、それを専門に研究することを許さない。少しく専門に

毛が生えて來ると、こちらからもあちらからも引張りに來て、『おれの所へ來て呉れ』と云ふ。『イヤおれは斯ういふ學問をする積りだから行けない』といふと、『目下天下多事だ、是非君の手腕に據らなければならぬ。君のやうな人はもう其上學問をする必要がない、俸給はこれだけやるから』など云つて誘ひ出すのである。さうすると本人もツイ其の氣になつて、折角やり掛けた専門の學問を打捨ててしまひ、ノコ／＼と其の招聘に應じて、事務官とか、教育家とか云ふ者になつてしまふのである。之は學者の方でも、意思が少しく薄弱であるか知れぬが、又た一方から云へば、學者を一寸鄭重にするやうで其實虐待するのである。果して鄭重にするならば、『月給は澤山にやらう、寐て居て本を讀むなり何うなり、勝手にするが宜い、お前の思ふ存分に専門の學問を研究しろ』と云はねばならぬ。彼の露西亞の學者見たやうにあつてこそ、初て眞の専門學者が出来るのであるが、今日の日本では中々さうは行かない。

最後の目的、即ち教育の第五の目的に就いて一言せん。之は少しく異端説かも知れないが、僕の考ふところに據れば。教育は云ふに及ばず、又た學問とは、人格を高尙にすることを以て最上の目的とすべきものでは無いかと思ふ。然るに専門學者に云はせると、『學問と人格とは別なものであれば、學問は人格を高むることを目的とする必要がない。他人より借金をして踏倒さうが、人を欺さうが、のんだくれになつてゴロ／＼して居やうが、己れの學術研究にさへ忠義を盡したら宜いぢやないか』と云ふ者もある。或は又た、『自分のやつて居る職務に忠勤する以上は、ナニ何所へ行つて遊ばうが、飲まうが、喰はうが、それは論外の話だ』といふ議論もある。學問の目的は、第四に述べた所のもの、即ち眞理の研究を最も重しとすればそれで宜い。人間はたゞ眞理を攻究する一の道具である、それでもう學問の目的を達したものである、人格などは何うでも宜いと云ふ議論が立つならば、即ち何か發明でもしてエライ眞理の攻究さへすれば、人より排斥される

やうなことをしても構はぬと云ふことになるが、人間即ち器ならず、眞理を研究する道具ではない。君子は器ならずと云ふことを考へたならば、學問の最大且つ最高の目的は、恐らく此の人格を養ふことでは無いかと思ふ。それに就いては、たゞ専門の學に汲々として居るばかりで、世間の事は何も知らず、他の事には一切不案内で、又た變屈で、所謂學者めいた人間を造るのではなくて、總ての點に圓滿なる人間を造ることを第一の目的としなければならぬ。英國人の諺に“Some-thing of everything”（各事に就いての或事）と云ふがある。或人は之を以て教育の目的を説明したものだと言ふた。之は何事に就いても何かを知つて居ると云ふ意味である。専門以外の事は何も知らないと云つて誇るのとは違ふ。然るに今此語の順序を變へて見れば、“Everything of something”（或事に就いての各事）と云ふことになる。即ち一事を悉く知るのである。何か一事に就いては何でも知つて居ると云ふ意である。世には菊花の栽培法に就いて、如何なる秘密でも知つて居

ると云ふ者がなる。或は龜の卵を研究するに三十年も掛つた人がある。さう云ふ人は、人間の智慧の及ぶ限り龜の卵の事を知つて居るであらう。其他文法に於ける一の語尾の變化に就いて二十餘年間も研究した人がある。さうすると其等の事柄に就いては餘程精通して居るが、それ以外のことは知らぬ。是は宇宙の眞理の攻究であるから、第四に述べた所の目的に適つて居る。されど人間としてはそれだけで濟むまい。人間は菊の花や、龜の卵を研究するだけの器械なら宜いけれども、決してさうではない。人間には智識あり、愛情あり、其他何かから何まで具備して居るを見れば、必ずそれだけでは人生を完うしたと云ふことが出来ぬ。して見れば専門の事は無論充分に研究しなければならぬが、それと同時に、一般の事物にも多少通曉しなければ人生の眞味を解し得ない。今日の急務は餘り専門に傾き過ぎる傾向を幾らか逆戻しをして、何事でも一通りは知つて居るやうにしなればならぬ。即ち菊の花のことに就いて云へば、これは菊花栽培に最も精通して

居る、それと同時に一寸大工の手斧ぐらゐは使へる、一寸左官の壁ぐらゐは塗れる、一寸百姓の芋くらゐは掘れる。政治問題が起れば、一寸政治談も出来る、一寸歌も讀める、笛も吹ける、何でもやれると云ふ人間でなければならぬ。之は随分難かしい注文で、何でも悉くやれる譯にも行くまいが、成るべくそれに近付きたい。所謂何事に就いても何か知ることが必要である。之は教育の最大目的であつて、斯くてこそ圓滿なる教育の事業が出来るのである。茲に至つて人格も亦た初て備はつて來るのであらうと思ふ。

然るに今日では妙に窮窳なることになつて居て、世の中に一種偏窳な人があれば、『あれは一寸學者風だ』と云ふが、實は人を馬鹿にした話である。又た自分も一種の偏窳な人間であるのを、『あれは學者風だ』と喜んで居る人もあるが、僕の理想とする所はさうでない。『あれは一寸學者見たやうな、百姓見たやうな、役人見たやうな、辯護士見たやうな、又た商人のやうな所もある』と云ふ、何だか

譯の分らぬ奴が、僕の理想とする人間だ。然るにそれを形の上に現はして、縞の前垂を掛けて居るから商人だ。穢い眼鏡を鼻の先きに掛け、髭も剃らず、頭髪を蓬々として居れば學者だと云ひ、其上傲然として構へて居れば、愈々以てエライ學者だと云ふやうに、圓滿なる發達の出來なかつた者を以て學者風と云ふのは、抑も間違つた話だと思ふ。蓋し學問の最大目的は人間を圓滿に發達せしむることである。

今日は學問の弊として、往々社會に孤立する人間を造り出す。彼のギツヂングスの社會學に『ソシアス』(Socius)と云ふ語があるが、之は『社會に立つて、社會に居る人』の意である。實に其通りで、苟も人間が此世に在る以上は、決して孤立して居られるものでない。人と云ふ字を見ても、或る説文學者の説には、倒れかける棒が二本相互に支ふるの姿勢で、双方相持になつて居るのが人だと云ふことだ。我々は社交的の動物であつて、決して社會以外に棲息の出來ないもので

ある。だから吾人々類が圓滿に社會に立つて行けるやうにするのが教育の目的でなければならぬ。されど輕卒にあちらへ行つては追従を云ひ、こちらへ來ては體裁能くやつてゐる小才子を以て、教育の目的を遂げた者とは云はぬ。先づ己れの修むべき所のものは充分に之を修め、さうして誰とでも相應に談話が出来て、圓滿に人々と交際をして行けることが教育、即ち學問の最大目的だと思ふ。

我々は決して孤立の人間になつてはならぬ。飽くまでも此の社會の活ける一部分とならぬばならぬ。然るに今までは動もすれば學問に偏してしまひ、學者と云ふと、何だか世の中を去り、山の中にも隠れて、仙人のやうになつてしまふのであるが、之は大なる間違である。蓋し相持ちにして持ちつ持たれつするが人間最上の天職である。彼の戰國の時、楚の名士屈原が讒せられて放たるゝや、『舉世皆濁れり、我獨り清めり』と歎息し、江の濱にいたりて懷沙の賦を作り、石を抱いて汨羅に投ぜんとした。彼が蒼い顔をして澤畔に行吟してゐると、其所へや

つて來た漁父が、『滄浪之水清兮、可_レ以_レ濯_レ吾纓。滄浪之水濁兮、可_レ以_レ濯_レ我足』と歌つて諷刺した。此歌の意味は、『お前が厭世家になつて河に飛込み、可惜一命を捨つるのは馬鹿なことだ。聖人と云ふものは、世と共に歩調を進めて行かぬばならぬ、今死ぬる馬鹿があるか』と云ふ意味であらう。して見ると屈原よりも、漁父の方に達見がある。又た彼の伯夷叔齊は、天下が周の世と成るや、首陽山に隠れ、蕨を採つて食つた。其の蕨は實に美味しかつたらうが、我輩の伯夷叔齊に望みたいことは、蕨が美味しかつたなら、何故其蕨を八百屋へても持つて來て、皆の人にも食はせるやうにしてくれなかつたか、又た蕨粉の製造場でも拵へて、世間の人と共に之を分ち食するやうにしなかつたかと云ふことだ。自分ばかり甘い／＼と食つて居るのでは、本當の人間と云へない。故に我々は孤立的動物でない、人間をソシアスとして考へねばならぬ。即ち人間は社會に生存すべき者であつて、決して社會以外に棲息の出來ないものであることを自覺せねばならぬ。又

た人間は只だの動物とは異つてゐる。又た單に道德的萬物の靈長と云ふのみでも無い。人間は社會的の活物である、故に人間をソシアスとして教育することが、最も必要なりと確信するのである。

我日本に於いては、封建割據の制度からも、自然と地方々々の人の間に隔壁を生じ、互に妙な感情を持つに至つた。近頃は大分に矯正されたけれども、尙ほ大分残つて居る。尙ほ又た人怖がらせをするやうな、妙に根性の悪いことがある。折々書生仲間の中には、頭髮を蓬々とし、肩を怒らし、短い衣服を着て、怖い顔付をし、四邊を睥睨しながら、『衣至_二于肝、袖至_二于腕』などと謳つて、太い棒を持つて歩いて居る。さうして成るだけ世間の人に不愉快な觀念を與へる。それを世間の人が避けると、『おれの威嚴に恐れて皆逃げてしまふ』などと云つて悦んで居る。女小供は度々さう云ふ書生に逢ふと、『また山犬が來たナ、嚙附きさうだから避けよう』と思つて避ける。併し犬なら犬除の呪もあるけれど、四本足では無

くて、二本足で歩いて居る奴だから、『何だか氣味の悪い奴だ』と思つて避けるまでである。之は決して其の書生等が悪いばかりで無い、今までの教育法の結果、凡べて他人を敵と視る考から産出されて居る。此考は封建時代の遺物である。僕の生國は今日の巖手縣、昔の南部藩であるが、國隣りに津輕藩があつた。南部と津輕とは、昔しから恰も犬猫のやうに仲が悪かつた。それが爲に南部の方から津輕の國境に向つて道路を造れば、津輕の方はそれとは丸て方角の異つた所へ道路を造ると云ふやうな譯で、少しも道路の連絡が付かない。又た津輕の方で頻りに流行つてゐるものは、南部の方では決して之を用ゐぬと云ふやうな妙な根性があつた。今までも尙ほ其の風が幾らか存して居る。此の双方の間に隔壁を作ることが、即ちソシアスの性格の無い證據だ。然るに今日の日本は、露國と戰つて世界列強の一に加はり、歐米文明國と同等の地位を占めたのである。されば今後の人間を教育せんとするに當つては、最早斯る孤立的觀念、即ち偏頗なる心を全く取

去り、其の大目的として、必ずや圓滿なる人間を造るやう、即ち何所までもソシ
アスとして子弟を薰陶するやうにありたい。之が又た一面に於ては、人格修養の
最良手段であらうと思ふ。

以上に述べた所のものを一言にして云はゞ、即ち教育の目的とは、第一、職業、
第二、道樂、第三、裝飾、第四、眞理研究、第五、人格修養の五目に岐れるのであるが、
之を煎じ詰めて云はゞ、教育とは人間の製造である。而して其の人間の製造法に
就いては、更に之を三大別することが出来やうと思ふ。例を取つて説明すれば、
其の一は彼の左甚五郎式である。甚五郎が美人の木像を刻んで、其の懷中に鏡を
入れて置いたら、其の美人が動き出したので、甚五郎は大に悦び、我が魂が此の
木像に這入つたのだと、尙も其の美人を踊らして自ら楽しんだと云ふことは、芝
居や踊にある。之は自分の娛樂の爲に人間を造るのである。第二例は、英吉利の
シユレーと云ふ婦人の著はした『フランケンシュタイン』と云ふ小説にある話だ。

其大體の趣意を一言に撮めば、或醫學生が墓場へ行つて、骨や肉を拾ひ集め、又
た解剖室から血液を取り來り、此等を組合せて一個の人間を造つた。併しそれ
は只だ死骸同然で動かない。それに電氣を仕掛けたら動き出した。固より脳髓も
入れたのであるから、人間としての思想がある。こちらから談話を仕掛けると、
哲學の話でも學術の話でもする。されど只だ一つ困つたことには、電氣で働くも
のに過ぎぬので、人間に最も大切なる情愛と云ふものがない、所謂人情が無い。
それが爲に其の人間は甚だしく之が欠乏を感じ、『お前が私を拵へたのは宜い、併
し是ほどの巧妙な脳髓を與へ、是ほど完全なる身體を造つたにも拘はらず、何故
肝腎の人情を入れて呉れなかつた』と云つて、大いに怨言を放ち、其の醫學生に
憑り付くと云ふ随分ソツトする小説である。此の寓意小説は只だ理窟ばかりを詰
込んで、少しも人間の柔かい所の無い、濇い情の無い、少しも人格の養成などを
し無い所の教育法を責めるものである。彼のカーライルは、『學者は論理學を刻み

出す器械だ』と罵つたが、實に其通りである。たゞ論理ばかりを吹込んで、人間として最も重んずる所の、温い情と、高き人格とを養成しなかつたならば、如何にも論理學を刻み出す器械に相違ない。さう云ふ教育法を施すと、教育された人が成長の後に、何故おれ見たやうな者を造つたかと、教師に向つて小言を云ひ、先生を先生とも思はぬやうになり、延いては社會を敵視する至る。故にかゝる教育法は、即ち先生を敵と思へと教ふるに等しいものである。

それから第三の教育法を説明する例話は、ゲーテの著はしたる『ファウスト』である。此戯曲の中に、ファウストなる大學者が老年に及び、人生の趣味を悉く味つた所で、一つ己れの理想とする人間を造つて見たいと思ひ、終に『ホムンキルス』と云ふ一個の小さい人間を造つた話がある。其の人間は徳利の中に這入つて居るので、其の徳利の中から之を取出して見ると、種々の事を演説したり、議論したりする。而してファウストは自分で深く味ひ來つて、人間に最も必要なるも

のと認めたる温き情愛をも、其の『ホムンキルス』の胸の中に吹込んだのである。そこで其の『ホムンキルス』は能く人情を解し、適れ人間の龜鑑とすべき言行をするので、之を見る人毎に讚歎して措かず、又た之を造つたるファウストも、自分よりも遙かに高尚な人間が出來たことを非常に感じ、且つ悦んだと云ふことである。之は出藍の譽ある者が出來たので、即ち教育家其人よりも立派な者が作られたことの寓説である。

今日我國に於て、育英の任に當る教育家は、果して如何なる人間を造らんとして居るか。予は教育の目的を五目に分けたけれども、人間を造る大體の方法としては、今云ふた三種の内の孰れかを取らねばならぬ。彼等は第一の左甚五郎の如く、たゞ唯々諾々として己れを造つた人間に弄ばれ、其人の娛樂の爲に動くやうな人間を造るのであらうか。或は第二の『フランケンシュタイン』の如く、たゞ理窟ばかりを知つた、利己主義の我利々々盲者で、親爺の手にも、先生の手にも合

はぬやうなものを造り、却つて自分が其者より恨まれる如き人間を養成するのてあらうか。將た又た第三のファウストの如く、自分よりも一層優れて、且つ高尚なる人物を造り、世人よりも尊敬を拂はれ、又た之を造つた人自身が敬服するやうな人間を造るのであらうか。此の三者中孰れを選ぶべきかは、敢て討究を要すまい。而して此等の點に深く思慮を鍊つたならば、教育の目的、學問の目的はどれまで進んで行くべきか、我々は其目的を何所まで進ませねばならぬかと云ふことも自から明瞭になるであらうと思ふ。

隨想錄尾

隨想錄

定價金壹圓

明治四十年八月十日印刷
明治四十年八月十五日發行

著者 新渡戸 稻造
東京市小石川區小日向臺町一丁目七十五番地

發行者 土屋 泰次郎
東京市麴町區平河町四丁目十三番地

印刷者 青木 弘
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 株式會社 秀英舎第一工場
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

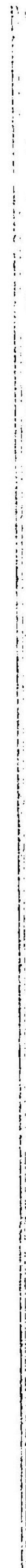


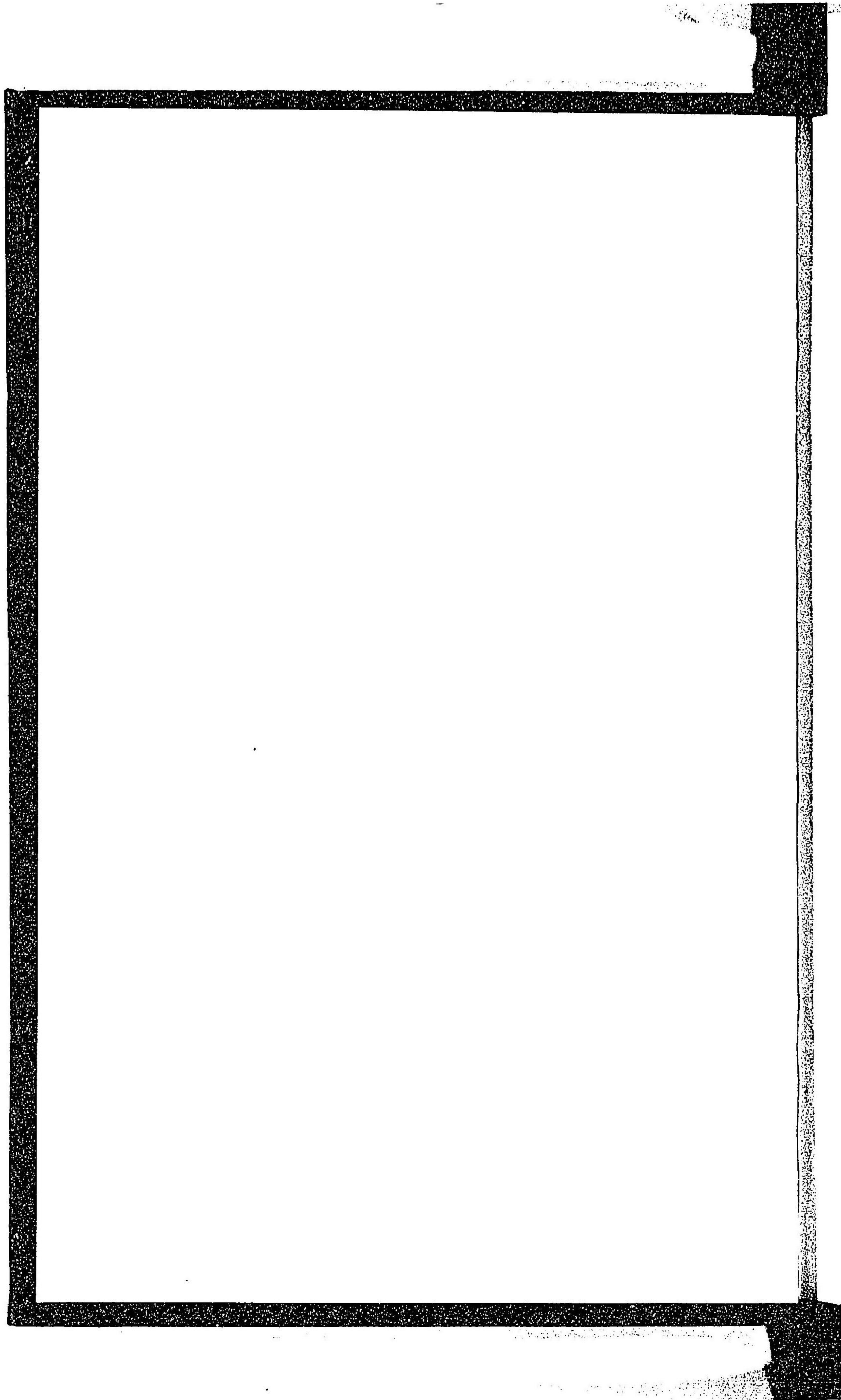
發行所

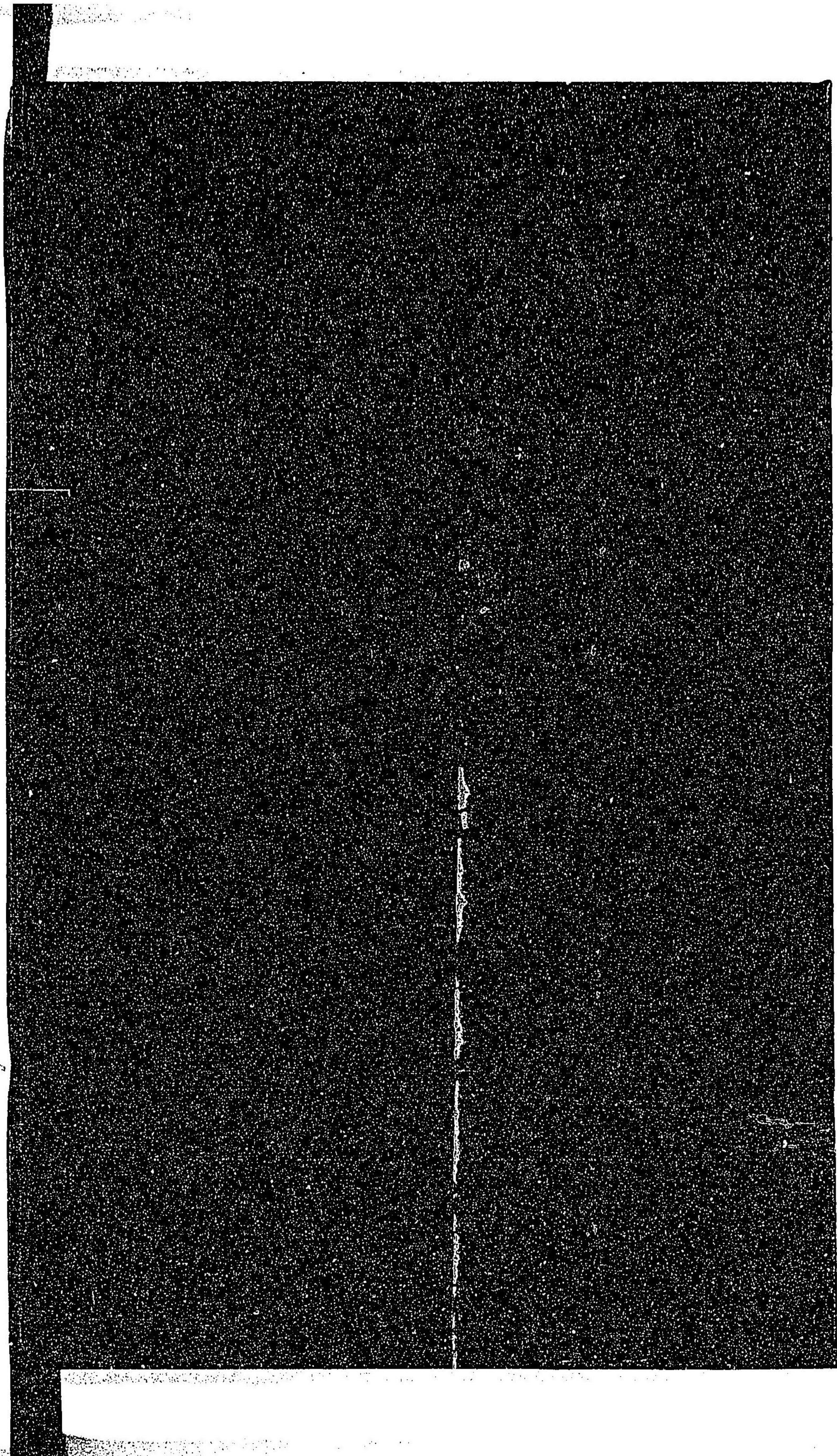
發賣元

丁未出版社
東京市麴町區五番町十六番地
英文新誌社

2/3x5







31

389

102346-000-7

31-389

随想录

新渡戸 稻造/著

M40

EAG-0199



